注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
魔術と死徒の姫と召喚獣

【作者名】
那由多２０

【あらすじ】
興味本意である森へと足を踏み入れた明久。
しかし、そこは誰も寄り付かない危険な場所。
文字通り獣に襲われ、命を落としそうになる。
その時、そこに吸血鬼が通りかかり、彼を助けるために血の契約を交わした。
それから一年後、その間に明久は訳あって吸血鬼である少女のもとを離れ、世界の各地を旅して回る。
その間にも、いろいろな出会いが待ち受け、その度に強く、そして優しく成長する。
それから四年の月日が流れたとき、文月学園に入学した明久が二学年を迎える頃に、新たな物語が幕を開ける！

アンチは保険です。
またこれはエムペにてマルチ投稿しております。

第1話

それは本当に綺麗な満月の夜だった。
僕が倒れふしている地面からは紅い血だまり。そしてその匂いを嗅ぎ付けた飢えた狼達が回りに集ってる。

「珍しい……ここは決して人間が寄り付かない森なのだけど」

薄れゆく意識のなか、声がした方向へ視線を向けると少女がいた。
少女が狼達を一睨みしただけで、狼は怯えたように逃げていった。

「……まあ分かってるとは思うけど、そんなに出血してたら死ぬわよ、あなた」

出血……ああ、この紅い池って僕の血だったんだ。
そっか、血がいっぱい抜けていく時って寒くなるんだね。死ぬ時って、こんな感じで……いいのかな？

「死ぬって聞いても驚かないのね……、ここまで死に疎い人間なんて初めて見るわ」

だって、実感湧かないし。
それに、この血が抜けていく感じ……嫌いじゃないもん。
でも、死にたくはないな。

「面白い人ね。選択肢をあげるわ。このまま死ぬのも良し、だけども生きたいと言うのだったら私が助けてあげる。……どうする？」

そんなの、決まってる！

僕はまだ死ねない、死ねないんだ！

「……助けて」

「生きる……と、受け取って良いのかしら？」

その確認に少年――明久は頷く。

「分かったわ。今から契約をする、これからあなたは吸血鬼として私と行動を共にする事になる。良いわね？」

突然きりだされた内容にもかかわらず、明久は再度頷く。少女――アルトルージュはそれを見ると、明久の元に屈み、そして首元に軽く甘噛みするように噛みついた。

「これにて契約は完了した。強く生きなさい、君」

「……夢、みたいだね」

懐かしい夢を見たな。

思えばあれから五年経ったのか。

「今日ってAクラスとの試合があったんだったね 」

雄二は、しっかりと対策を練ってきたのだろうか？

心配するだけ無駄だね、彼はこの時のために試召戦争を起こしたのだから。

着替えながらそんな事を考えていると、ふと首筋の小さな傷に目が

移る。

「だいぶ……留守にしちゃってるけど、怒ってないよね？」

夢の中の少女。

助けられて以来、僕は彼女と一緒に暮らしてきた。

「怒ってると思うが…」

「あ、おはようリィゾ」

「おはよう明久、朝食の用意は済ませてある」

「ありがと。それとやっぱり怒ってる？」

「絶対、幾らなんでも四年も姿を見せなかったら当然であろう」

うぐ……確かに。

流石にそろそろ会いにいかないと後が怖いだろうなぁ……。

『姫』って見かけによらず、結構寂しがり屋だしね。

――――――――――――――――

燦々と綺麗に反射する道路が目を細め、肌に降り注ぐ春風がとても心地よい。

――なんて普通の人ならそう言うのだろうけど……私にはちょっと辛いものがある。

……日光、しんどい。

「っと。見かけない顔だが……ああ、転校生だな」

ダルい頭を持ち上げ、見上げると、そこには体つきのがっしりとした教師が腕を組んで立っていた。

「ああ、すみません。ここはスポーツジムでしたか。てっきり学校かと」

「ちょっと待て!?ここは学校で合ってるぞ！」

……嘘ぉ。

「それはそうとほら、振り分け試験の結果だ」

同じ反応をした人が前にもいたのか、教師は遠い目をしながら私に結果の封筒を手渡した。

封の端を捲っていきながら、あることを尋ねる。

「ここに明久って人はいますか？」

「何だ、明久の知り合いか。ああ、規律上クラスまでは公表出来んが、あいつなら確かにここにいるぞ」

「そうですか、ありがとうございます」

校内まで歩きながら、開いた封筒から抜いた用紙を確認する。

アルトルージュ・ブリュンスタッド　Ａクラス

「やっと会えるわ、明久」

それを封筒に納めなおした彼女は、早足で指定されたクラスへと向かっていった。

――――――――

「まずは皆に礼を言いたい。俺らには無理だと言われていたにもかかわらず、ここまで来れたのには感謝している」

壇上にたった雄二は、教室の皆を見回してそう切り出した。

「意外だね、雄二がそんなこと言うなんて」

「いや、これは紛れもない俺の気持ちだ。　ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ち　たい。世の中勉強さえ出来れば良いってものじゃねぇっていう事を……成績だけが全てじゃねぇって事を教師共に突き付けてやるんだ！」

「「「そうだ、そうだ!!」」」

「いや、雄二はともかく、君達は全く役に立ってなかったよね」

「「「……」」」

あ、いっけない。折角の士気が……。

雄二も黙っていてくれ、と必死な表情で僕に懇願してるし。

「こ、こほん。皆、ありがとう。そして残るAクラス戦　だが、これは一騎討ちで決着を着けたいと考えている」

「……は？」

「誰と誰が？」

「一騎討ちするんだ？」

雄二の言葉に、教室中がざわめき出す。ま、普通に考えれば学年主席に一対一で挑むなんて自殺行為だしね。

「まぁ聞け。やるのは俺と翔子だ」

ざわめきが一段と大きくなる。当然だ、霧島さんの実力はクラス問

わずに学年に知れ渡ってるんだから。

「坂本、何か策があるの？」

「一騎討ちのフィールドを限定するつもり　だ」

「フィールド？何の教科でやるつもり　じゃ？」

「日本史だ。ただし内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は１００点満点の上限有り。ま、召喚獣勝負じゃなく点数勝負だな」

　美波の質問に雄二は答え、秀吉はその理由　を問う。　なんでそんな形式にするのかは分かるけど……ちょっと罪悪感沸くよね。

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。そ　れは、ある問題が出ればアイツは確実に間違えると知っているからだ」

「ある問題？」

「ああ。その問題とは……『大化の改　新』」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？小学生レベルでそんな問題が出　てくるのかしら？」

「いや、そんなに掘り下げた問題じゃな　い。もっと単純な問いだ」

「それは年号かの？」

「お、よくわかったな秀吉。そうだ、お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ」

　いや、確かにそれだったら霧島さんにも勝てるかもしれないけどさ。何故なら……ああ、もういいや。うん、それでいこう。

「あの……」

「なんだ？姫路」

「坂本君って、霧島さんと知り合いなんで　すか？」

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

　そう、大事な幼馴染が教えてくれたこと　だ。忘れるはずがないっ

て!?

「総員狙えぇぇぇぇーーーっ!!!」
「なっ!?何故須川の号令で皆一斉に武器を構える!?」
「黙れ男の敵！Ａクラスの前にキサマを殺　すッ！」
「俺が何をした!?」
「男とはッ！『愛』を捨て『哀』に生きる　者成りッ！それをキサマは汚らわしき欲望　を以て気高き才色兼備の霧島翔子を唆し、　我等の鉄の掟を踏みにじったのだッ！」

うん、こんなバカやらなけりゃ彼らにも春が来るかもしれないんだけど。そうなるのは何時になるのやら……。

「あの、吉井君」
「ん？何かな、姫路さん」
「吉井君は、霧島さんみたいな娘が好みな　んですか？」
「うーん……」

腕組みをして暫し考える。

「確かに霧島さんは美人だけど…好きではないかな」
「……」
「けど好みかと言われたら、って……わーお、何で姫路さんが僕に対して攻撃態勢取ってるの!?そして美波、君は何故教卓なんて物騒な物を僕に投げつけようとしてるのかな!?」
「吉井君にはお仕置きが必要な様ですね」
「覚悟しなさいアキ。その性根を叩き直し　てあげるわ！」

……おかしい。
僕と二人の会話が成り立ってないような気がする。

「だぁぁぁ!!とりあえず黙ってろ!!姫路に島田もだ!!　俺は小さい頃にアイツに間違った年号を教えていたんだ」
「貴様ッ!!まだ幼くて何も知らない純粋な霧島さんに嘘の情報を施していやがったのかッ!!」
「何て外道な奴なんだ!!」
「……許されざる行為…」
「えーい！黙れ黙れぇぇぇ!!!」

あのー、姫路さんに島田さん？
どうしてまだ攻撃態勢を解いていないのかな？
あはは、お空が綺麗だな。
なんてことを考えながら僕は現実逃避してた。

第2話

「んじゃ明久、Aクラスに交渉しに行くから着いてきてくれ」

「了解……って、何故に僕だけ？」

二人だけで交渉に行くのって大丈夫？

「本当は秀吉とムッツリーニにも来てもらいたかったんだが……そうなると余計なのも着いて来るからな。あまり場を混乱させたくない」

後ろの姫路さんや美波を見ながら、雄二はため息混じりにそう呟いた。

確かに、先ほどの件を考えるとその考えは妥当だと思う。

「失礼するぞ」

「あらあなたは……代表の旦那さん？」

「誰が旦那だっ!?」

Aクラスに入るなり、いきなりの漫才に思わずずっこけそうになるのを何とか踏みとどまった。

「まあいい。翔子はいるか？」

「代表？ちょっと待っててね」

そう言うと優子さんはパタパタと教室の奥の方へ駆けていき、しばらくして黒い長髪の女性を連れて戻ってきた。

「……呼んだ、雄二？」

雄二の元へ駆けつけたときに気づいたのか、彼女の視線が僕の方へと移った。

それに気づき、僕は彼女に片手を挙げると彼女もコクりと頷いてくれた。

「霧島さんおはよう」

「うん、おはよう明久」

霧島さんが雄二以外の男子の僕に心を開いてくれるようになったのって、確か中学の『ミシッ』時だったな……って、何か腕が痛いんですけど!?何で美波と姫路さんがここにいるの！そして何で僕に間接技極めてるの!?

「どういうことアキ。何で名前呼びにされてるのかしら!?」

「そうですよ。どういう事ですか、吉井君？」

何でそれだけでこんな事態になってるのかは分からないんだけど、とりあえずは

「二人とも、場を混乱させたくないからひとまず離して」

「な、何で痛がってないのよ!?」

間接を極めてるのに、顔色一つ変えない僕に驚愕する美波。だのに離そうとしない辺りの執着は関心ものだ。

「二人とも、話が進まないから明久君の腕を離しなさい」

「木下は黙ってて！」

「そうです！黙ってて下さい！」

「いいから離しなさい!!!」

「「っ!!?」」

彼女の剣幕に怯み、束縛が緩んだ隙を見計らってするりと抜け出した。

「おい、姫路に島田。お前らは教室に戻ってろ」

「嫌よ、アキにオシオキしなければいけないんだから」

「ええ、オシオキが終わってません」

あ、雄二のこめかみに青筋が一本増えた。

「おい、二人とも……」

「しつこいわね、嫌と言ったら嫌――」

「俺に二度も言わせるなよ？」

「「ヒッ!?」」

一文字一文字に含まれた殺気に二人は思わず悲鳴を上げた。

「鉄人、この二人を連れ戻してくれ」

「西村と呼べと言ってるだろうが。まあいい、ほら、戻るぞ」

何処からともなく現れた西村先生は、ため息をついて姫路さん達をFクラスの方へと引きずっていった。

「……明久、大丈夫？」

「大丈夫、僕が頑丈なのは霧島さんが良く知ってるじゃない。でも心配してくれてありがとうね」

「……いい。明久にはお世話になってるから」

「うちの者がすまなかったな、翔子。　ここには試召戦争としてAクラス代表に一騎討ちを申し込む布告をしにきたんだ」

「……そろそろだろうとは思ってた」

流石にDクラス、Bクラスに勝利したとなるとそれくらいは気づくか。　霧島さんは後ろを振り返ると、優子さんに助言を求めるも

「……どうする？」

「そうね……受けてもいいんだけど」

そこで木下さんは雄二を見て、難しい表情をした。

「坂本君が何の勝算も無しに、こんな提案してくるとは思えないのよね」

ギクリと震える雄二の肩。

優子さん……君はすごく恐ろしいよ。

「なら各クラスからの五人勝負で試合したらどう？」

その声を聞いたとき、僕は懐かしさで心が温まるのと同時に、背筋に悪寒が走るのを感じた。

どうして……どうして

「アルトがここにいるのさっ!?」

「あら、折角の再会だと言うのに随分ね」

此方に歩いてくる少女。　周囲の光を吸収し、艶めいているような漆黒の髪、透き通るような純白の雪のような肌。そして赤よりも濃い血のようなルビーのような瞳。

「それはいいかもしれないわね」

優子さんはアルトの提案に深く頷く。

ああ、これが明久の言ってた

「ちょっとあんた誰よ！」

って島田!!お前どうやって戻ってきたんだ!?
鬼のような表情をしながら、島田はアルトルージュと呼ばれた少女に向かって詰め寄る。
しかし、その前に明久が立ち塞がった。

「ごめん美波、姫に近づかないでもらえる？」

「どいてアキ、ウチは後ろのヤツに話があるのよっ！」

「いい加減にしないと、そろそろキレるよ…」

その一言で島田は凍りついたように動かなくなった。いや、理由は明久の瞳か。
今のアイツの目は何時ものような穏やかな感じではない。
見るもの全てを標的に捉えるような、鷹の様に鋭い眼光を放っている。

「あぁー、すまん。話進めていいか？その…」

「アルトルージュ・ブリュンスタッド。アルトルージュで良いわよ」

「アルトルージュが言ったのでいいか？」

「……うん、条件は負けた方がなんでも言うことを一つ聞く、で」

まあ、こちらの要求ばかりだからそれくらいは仕方ないか。て、おいムッツリーニ。何カメラの手入れを始めている。そして男子共もなに白板なんか用意してるんだ。お前ら何か重大な勘違いしてるぞ……。

「分かった、それでいこう。じゃあそろそろ戻る事にする。またな、翔子」

「じゃあね、霧島さん、アルトも」

「……うん」

「さ、いこう雄二」

「…お前なんでそんなに焦ってるんだ？」

その原因はすぐに分かった。

ふと、後ろを見るとアルトルージュは微笑みながら明久の後ろを見つめていた。

ただ、その笑みは何だか……この世の物とは思えないほどに、怖かった。

……彼女に何をした、明久。

こうして明久に急かすように背中を押されながら、俺達はFクラスへと戻った。

「アキ!!さっきの人とはどういう関係よ!!」

教室に戻るなり、また小うるさいのが明久に詰め寄っていた。

「どういう関係なんだ、明久」

その点は俺も気になっていたので明久に聞いてみる。当の明久はどう答えたらいいのか難しいのか、しばらく考え込んでいた。

「そうだね。簡単に言えば護衛の騎士、かな？」

「「「「騎士？」」」」

「うん、それと恋人」

「「「「恋人っ!?」」」」

騎士といった言葉には、今一ピンと来なかったのに、恋人という単語には急に殺気立つＦＦＦ団と女子二人。

だが、明久の鷹の目により行動を牽制され動けずにいた。

第3話

「一回戦の代表は前に出てきてください」

まず始めにAクラスから出てきたのは優子さんだった。いきなりの重要戦力にこちらのペースが崩れそうになる。

雄二はというと、あまり調子が乱れていないのか口元に笑みが浮かんでいた。

「よし、使い捨て装甲板作戦を実行する。須川逝ってこい！」

「断る！名前からして碌なことがない！」

うん、その辺りに関しては須川君に同情する。

それじゃあ彼に死んでこいと言ってるようなものだ。

しかもそれを平然と言ってのける所がまたなんとも……。

雄二はわざとらしくため息を吐くと、何やら諭すように須川君に語り始めた。

「はぁ……。いいか、須川。確かに名前の通り捨て身の作戦なのは間違いないだろう。だがな、よく考えてもみろ。自らを犠牲にしてでもクラスを勝利に導こうとする男、他の人からはどう見える」

「どうって……」

「憧れの対象、上手くいけば女子からの注目の的かもよ」

「行ってくるぜっ!!」

――Ｆクラス　須川亮　ＤＥＡＤ――

「ま、捨て身でもそこそこ頑張ってくれなきゃモテるわけねぇけどな」

「君は悪魔だ」

こいつ……後になってからいい笑顔でさっぱりと言い切りやがった。っていうか何でＬＯＳＥじゃなくてＤＥＡＤ？

「次は明久だ、頼んだぞ」

「そうだね、僕的にもこのあたりがいいタイミングだと」

「じゃあ私がいくわね」

「――思うわけないよね。もう少し様子を見るよ」

「明久、お前の意見は無視する。さっさと行け」

「酷くないっ!?」

本人なのに！

……行くの怖いな。だってアルトがすごい笑顔で僕を手招きしてるんだ。しかも目は笑ってない。

「教科は日本史でお願いします」

まあ、今はとにかく勝って早いとこ逃げ出そう。幸い科目選択権はこちらにあるし、日本史だったら日本人では無いアルトには分が悪い

はず。

Ｆクラス　吉井明久（１８５点）

ＶＳ

Ａクラス　アルトルージュ・ブリュンスタッド

（３７５点）

……は？

え、え、ちょっと待って。

何、あの点数。

何で日本人でもないアルトがこんなに取れてるんだっ、てそうかっ!?

「私は日本人では無いけど、あなたよりは長く住んでるわよ」

そうだったぁぁーーっ!!??

よく考えればアルトって、僕の何十倍も生きてるんだった。そりゃ出来て当然か。だって、直接歴史を体験してきてるんだもの。

「積もる話がいっぱいあるから早く終わらしましょうか」

「それは遠慮するよ……フッ!!」

そう言うと、アルトの召喚獣に向けて木刀を投擲する。

「っ……扱いずらいわね……！」

アルトは強引に召喚獣の身体をのけ反らせ、何とか鋭い回転音を響かせながら直襲してくる木刀を避けた。木刀はアルトの召喚獣の真横を通りすぎ地面に突き刺さり

「「「!!??」」」

その周囲のフィールドに大穴を空けた。

あの木刀には鉄甲作用がかけてあって、ぶつかったものには相当なダメージを与える。

舞い上がった土煙を掻い潜って、今度はアルトの召喚獣がこちらに向かって攻撃してきた。

「武器なんて捨てたからよっ!?」

後ろから美波の怒声。

うん、確かにそう思いたいのも分かる気がするよ。でもね、

「――投影（トレース）」

「開始（オン）――」

ギィィンッッッ――――!!!

それを僕は手にした白と黒の双剣を交差させて、受け止める。

……っぅ、何て重さなんだよ。

「「「え？」」」

ふと周りを見ると、皆が驚いていた。

「吉井君、それは？」
「はい、高橋先生。実は僕……魔法使いなんです」
「怒りますよ」
「すみません。多分、僕としての特質が召喚獣に影響したと考えてもらったらいいと思います」

……魔法使いっていうのも近からず遠からずなんだけどね。
アルト達の元を離れ、しばらく旅を続けている間、僕は確実に強くなった。いい師匠達に恵まれ、いい仲間とも出会い、今の僕がいる。簡単にはやられないよ？アルト！

それからしばらくの間、A・F関わらずそこにいた全員の生徒が、二人の戦いに魅入られていた。
アルトルージュによる辛うじて目に追えるような強襲の嵐、それを明久は攻撃の方向を外に逃がすようにして、一撃一撃を確実に捌いている。
しかしそれも段々と戦況に変化が現れ始めた。
操作に慣れ始めたアルトは次第に明久を圧倒し始めたのだ。

「いつまでもこのペースじゃ、間違いなくこっちが負けるね。そろそろ決めなきゃ」

僕は召喚獣に手にしていた『干将』をアルトの召喚獣に投擲させると、莫耶を構えそのまま突進する。アルトは干将を避け、莫耶をもって突っ込んできた僕を受け止める。
だけどそこで終わりじゃあない。
後方から僕に向けて戻ってくる干将がアルトの召喚獣に襲いかかり、とどめを！

――刺すことはできなかった。
アルトはギリギリの所でそれを回避し、干将は僕の召喚獣に深々と突き刺さったのだ。
同時に僕の腹部に刃物で貫かれたような激痛がしたけど、それは一瞬で治まった。相変わらず吸血鬼の身体ってすごいな……。
僕の召喚獣は光の粒子と化して、姿を消した。

Ｆ　クラス吉井明久　（０点）

ＶＳ

Ａクラス　アルトルージュ・ブリュンスタッド
（１１２点）

「勝者、Ａクラス」

教室に高橋主任の声が響き、この試合はＡクラスの勝利となった。

「お疲れさん」
「ありがと、それとごめん」
「いや、よくやってくれた。お前のお陰だけでも学力だけが全てではないって証明になったしな」
「そう、ならよかった。何だか疲れたから休んどくね」

奥に進み壁にもたれ掛かるようにして胡座をかく。　そして、そのまま襲ってくる睡魔に素直に従うようにして、僕は眠りにおちいった。

第４話

「……寝ちまったか」

俺は壁に身を預けて、静かに寝息をたてはじめた明久を見てそう呟く。

「雄二よ、いいのかの？まだ試合は残っておるというのに……」

「いいんだ秀吉、少しは休ませてやれ」

スースーと、規則正しい呼吸を繰り返している明久の寝顔――そこからは蓄積されたような疲労がありありと滲み出ていた。

「今までに何があったか知らないが苦労してたんだな」

「そうみたいね」

俺の呟きに同意するようにして、隣にアルトルージュが現れる。彼女はそのまま明久の側まで寄り、そして壁にもたれ掛かってる明久の頭をそのまま自分の膝へと移動させた。これが所謂膝枕ってやつか。

「とても厳しい『世界』で生きてきたのね」

アルトルージュは明久の寝顔を見て、確信したようにそう呟くと、頭を撫ではじめた。

こうして見ると、二人が恋人なんだなって改めて実感できるな。って秀吉？何でそんなに羨ましそうな顔してるんだ？

あとムッツリーニ――

「カメラをしまえ」

「……そ、そんな……っ!?」

いや、気持ちは分かるがちゃんと本人に同意を得てから撮れ。確かにあの二人の組み合わせなら学園の奴（主に女子）に人気がありそうだけどな。

『会長、あの異端者をどういたしますか？』

『うむ殺せ』

『『はっ！』』

……やば。ＦＦＦ団の存在すっかり忘れてた。

「……ムッツリーニ、やっぱ撮影許すからアイツら片付けるの手伝え」

「……御安い御用！」

こうして俺とムッツリーニは明久を守るべくＦＦＦ団と乱闘を始めたのだった。

「はぁ……。手間かけさせやがって」

「……一瞬で終わると思った。大きい誤算」

「お疲れなのじゃ」

俺達の目の前には人の山。そして隣には息切れぎれのムッツリーニ。俺も殴っては投げての繰り返しで何だかんだ言ってちょっと疲れた。

「……それにしても姫路に島田は諦めが悪いのう」

同感だ。今はアルトルージュが睨みを効かせてるから動きを見せないが、ちょっとでも目を離すとすぐさま襲いかかろうとするだろう。

「ムッツリーニ。行ってくれ」

「……分かった」

「じゃ、僕が行こうかな」

向こうから出てきたのは、ショートヘアの緑髪の女子。……今までこんな女子はいなかったと思うが？

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子だ　よ。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

「……保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤がムッリーニに話し掛ける。

「でも、僕だってかなり得意なんだよ？……　キミとは違って……

実技で、ね♪」

「……じ、実技…（ブシャァァァ」

「「「「ムッツリーニィィィ!!??」」」」

まだ十分もたってないのに復活するウチの男子。この生命力のせいで手こずったんだよな。

「大丈夫か？ムッツリーニ」

「……問題ない」

……それほどの出血量は大丈夫とは言わんぞ？

「そっちの、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったら僕が教えてあげようかな？　もちろん『実技』でね♪」

「アキには永遠にそんな機会来ないから保健体育の勉強も要らないわよ！」

「そうです！永遠に必要がありません！」

こいつら、すごく失礼で酷いこと言うよな。須川あたりだと血涙流しながら自殺してるぞ……。

ていうか二人は明久が好きなんだよな？これ聞いてる限り、すげぇ疑問に感じるんだが。

「……」

「ん、どうしたアルトルージュ？無言になったけど」

「ふふ、気にしなくていいのよ」

「……あん？」

パスを繋ぐときにもうヤっちゃってる明久でした。

……ていうかアルトルージュって、すごい整った身体つきしてるな。

待て待て翔子、俺に殺気を向けるな。ていうか何で俺の一人言にも等しい思考をキャッチ出来るんだお前は……。

背筋に冷や汗が垂れるのを感じた。

「そろそろ召喚してください」

高橋先生、冷静すぎるのもダメなんだが……。

「はーい。サモンっと」

「……サモン」

二人の召喚獣が姿を現す。　ムッツリーニの召喚獣は小太刀二振り。対して、工藤の召喚獣は…

「なっ、何だあの巨大な斧は!?」

見るからに破壊力抜群そうな大戦斧に加え、腕輪まで装備しているか。強そうだな。

「では第三試合、始めっ！」

「実践派と理論派、どっちが強いか見せて　あげるよ」

……テストの点数や召喚獣の勝負に、実践派も理論派もないと思うのだが？

「……工藤愛子、お前では俺には勝てない」

「へぇ～自信満々だね。けど――っ！」

工藤の召喚獣はムッツリーニの召喚獣に突っ込んで行った。

「それじゃあ、バイバイ。ムッツリーニ　君っ！」

「……加速」

「…え？」

「……加速、終了」

［保健体育］

Ｆクラス　土屋康太　５７２点
ＶＳ
Ａクラス　工藤愛子　４２３点

さすがムッツリーニだ。　保健体育だけならこの先もコイツを超せる者はいないだろう。

後は他の科目にも、その情熱を向けてくれれば願ったりかなったりなんだけどな。

「そんな……」

余程保健体育に自信があったのか、膝をついて呆然とする工藤。ま、これが最後の勝負って訳じゃないから次頑張れ。

「……終わった」

「あぁ、さすがだ」

「……これでAクラスの2勝1敗ですね。次の方どうぞ」

「じゃあ姫路頼む」

「あ、は、はい」

さて、この勝負が一番の問題なのだが……

「それなら僕が相手をしよう」

そろそろ次席が出てくるとは思った。久保は一年の頃から姫路の成績に執着したって噂があったからな。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「構いません」

故に、あの二人には大それた点数差はないはずだ。恐らくこの試合、点数の高い方が勝利する。
これまでを見ているあたり、姫路の方が僅かに高かったとは思うのだが。

「それでは開始してください」

「「サモン!!」」

総合科目

Ａクラス　久保利光　３９９８点
ＶＳ
Ｆクラス　姫路瑞希　４４０３点

……これは予想の範囲外だ。

「マ、マジか!?」

「いつの間にこんな実力を!?」

「この点数、霧島翔子に匹敵する　ぞ・・・！」

姫路の方が上だとは思っていたが、これほどまでに上がっていたとは……。

「く……っ！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ？」

「……私Ｆクラスの皆の事が好きです誰かの為に一生懸命になれる皆がいる、このクラスが」

「Ｆクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんですっ！」

……言っている事には賛成しかねるが、この勝負……姫路の勝ちだな。

後は俺か……

第5話

「……んっ」

結構寝たような気がする。……っていうか寝る前と今とで何かが違う。

まず何で視界が横向けになっているのだろうか？そしてこの温かいクッションみたいな感じがするのは何なんだろう。

徐々に頭が回転していき、状況が段々と分かってきた。

「……アルト、何やってんの？」

「膝枕よ」

成る程、膝枕か。

それならこの柔らかい感触も頷ける。

うんうん。

……いやおかしいでしょ。

「まあいいや。それより……っと、いたいた。雄二」

「何だ明久？」

「今どれくらいまで進んだ？」

「次が俺ってとこまでだな」

もう最後じゃないかっ!?

「……ゴメンナサイ～ダイブネテマシタ～」

「分かった。分かったから土下座して片言で謝るな…」

良かった。

どうやら気にしていなかったようだ。

それなら再びアルトの膝に顔を埋めて眠りにつくと――

「寝るなよ？それを見てると流石の俺も殺意沸くからな」

しようという贅沢な考えはどうやら許してもらえそうにないらしい。

――――

「最後の方は前に出てきてください」

「……はい」

高橋先生の指示に前に出てきたのは霧島さん。

そしてこちらからは雄二が出る事になる。

そういえば

「ねえ、アルトがここに来たってことはもしかして……」

「ええ。彼女もいずれここに来ると思うわ」

あ、やっぱりですか……。

ま、アルトの表情を見る限り上手くやっていってるみたいだ。

脳裏に輝くような長い黒髪を翻し、不機嫌そうな表情をした彼女を思い浮かべると思わず笑ってしまった。

「教科はどうしますか？」

「日本史、内容は小学生レベルで百点満点の上限ありで頼む」

予想していたことではあったけど、やはり雄二の宣言にＡクラスからざわめきが起こった。　　ま、それが普通の反応ではあるんだけど。

「上限ありで小学生レベルだって？」

「そんなの満点確実だろ」

「わかりました。しかし問題を用意しなくてはいけませんので、しばらくの間待機していてください」

そう言って高橋先生は教室を出て行く。

「アルト」

「どうしたの？」

「……彼女、怒ってた？」

「『明久はどこいったのよぉぉ!!?』って絶叫してたわよ」

「うわ……怒ってるねすごく」

四年前に知り合って仲良くなってから

長い間姿を眩ましてたからなぁ。

「では準備が出来ましたので移動しましょ　う」

高橋先生が戻ってきたので雄二と霧島さんは教室を出て行った。
少ししてプラズマディスプレイに二人の姿が映る。

「では教科は日本史、内容は小学生レベル　で方式は百点満点の上限ありです。　カンニング等の行為は失格となります」

「……はい」

「ああ」

「では始めてください」

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに一問ずつ問題が表示される。うわ…簡単すぎる。　さすが小学生の問題だ……。
僕としては、こういった勝ち方はあまり好ましくないんだけど……出てるかな？

――（　）年大化の改新――

あ、出てる。

「これで、ウチ達も」

「ああ。これで俺たちの卓袱台が」

「「システムデスクに！」」

要の問題が出て歓喜に騒ぎ始めるＦクラス。それを僕は複雑に、その事を知らないＡクラスは不思議そうに見ていた。

「終了です。筆記用具を置いてください」

終了の合図をし、高橋先生は二人のテスト用紙を回収し採点する。しばらくして雄二と霧島さんが戻ってきた。　そして高橋先生の採点も終え、２人の結果が表示された。

【日本史勝負　１００点満点】

Ａクラス　霧島翔子　９７点

ＶＳ

Ｆクラス　坂本雄二

９７点

「ははは！間違えちまったっ☆」

「「坂本ぉぉおおお!!!!!!」」

良い笑顔で頭をかく雄二に怒り狂ったＦクラス男子勢を抑えながら、僕はその後に複雑な表情をしている雄二に近づく。

「……さっきの、わざと間違えたんでしょ？」

「ああ、こんな勝ち方……今思えば全然俺の望んでいたものじゃないからな。その、すまん……」
「ううん、安心したよ。僕としてもこの結果で良かったと思う」
「……ありがとな」
「この後どうするのか、双方の代表者で話　し合い、決めてください」
　これ以上やっても負けるか相討ちか？
「なら条件付きで終戦でいいかしら？」
　しばらく顎に手を添えて考え込んでいた優子さんがそう言うと
「なっ、優子!?」
「このままいけば勝てるのに……」
「……優子の言ってることは正しい。Ｆクラスに追い込まれたのも事実だし、それに――」
　霧島さんはＡクラスの生徒達をゆっくりと見渡し、
「……それにこのままでも勝てるなんて保証はどこにもない」
「え？」
「……今出た私達Ａクラス主力の点数はさっきのテストで殆んど無くなったに等しい」

なるほど、此処で雄二が姫路さんかムッツ　リーニのどちらかを一対一に持ち込ませれば……

「それでいいのか？」

「……うん」

「じゃあ此方は3ヶ月試験戦争を行わないってことでいい？代表」

「……うん」

「分かった。此方は和平としてそれを受け入れる」

教室があれ以上劣化しないなら3ヶ月の試験戦争禁止は軽いか。

「……それとすまんな翔子。俺はあの時の事をダシにお前に勝とうなんて考えちまってた。この勝負、俺の負けだ」

「……なら命令権は私」

「そうだな」

おーいムッツリーニ。何故にカメラ取り出してるの？

「手伝うぜ、ムッツリーニ！」

「千載一遇の百合光景を見逃す俺ではない！」

「おい、誰かレフ板持ってこい！」

やっぱり……とんでもない勘違いしてるね君達は。霧島さんは同性愛者なんかじゃ無いってのに。

「……それじゃあ、今度映画一緒に映画行く」

「わかったよ……」

「「は？」」

Fクラスだけでなくaクラスの人達も呆けた声を上げた。

「あの、代表？」

「……なに？」

工藤さんが皆の代表として声をかける。

「えっと、Fクラス代表との関係って……」

「……私の伴侶（ポッ）」

「いいや、幼なじみだ。今のところはな」

今のところ……ね。こっちとしては二人が付き合うのを楽しみにしてるんだけど、もうあれから四年目だよ？早くしてほしいんだけど……。

「まぁ、そう言うことで頼むわ」

「……わかった」

ま、幸せそうだから良いんだけど。

「…さて、お遊びの時間は終わりだ。Ｆクラ　スの諸君」

「西村先生？どうしたんですか、こんな時間に？」

「おめでとうＦクラスの諸君　。本日付をもってＦ　クラスの担任は俺が受け持つことになった。これから死に物狂いで勉強が出来るぞ」

「「何ぃぃぃぃぃぃ!!!!???」」

「いいか。確かにお前達はよくやった。学年の底辺であるお前らがここまでや　るとは正直夢にも思わなかったぞ。だがな、　いくら学力が全てでは無いとは言って　も、人生では必要になるときが必ずやって来る。それが現実であり、蔑ろにして良い物でもない。というわけで明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

「「おのれ鉄人っ、月のない夜道には気を付けやがれ!!」」

「……そうだ。只でさえ試召戦争で本来受けるべき授業が大量に潰れてるんだから休日まで補習漬けにしてやるのもいいかもな」

「「うぎぃぃ!!??」」

ま、さすがの西村先生もそこまではしないと思うけどね。今のは彼らに効果的な話術だと思ったのだろう。

「さ～て、アキ……」

「ねえ明久」

えーと……美波がなんか寄ってきてるけど、この場合はアルトを優先するのが普通だよね？

「どうかした、アルト？」

「久しぶりに私の所で暮らさない？」

あ……ああ。
それも良いかもしれない。
なんか千年城も懐かしくなってきたし。

「そうだね、いいよ。久しぶりにアルトに料理作ってあげたいから買い物着いてきてくれない」

「それはいいわね。分かったわ」

「じゃ、行こっか」

「あ、ちょっと待ちなさ――」

ごめん美波。
悪気は無いんだ。
……多分。

「ねえ、フィナなんだけど……その」

「どうしたの？」

「ホモぐせ……少しはマシになったの？」

「……それが全然よ」

買い物を終え、ふと気になったことを尋ね返ってきた言葉に思わず回れ右をして逃げようとしたところを、がっしりと掴まれてしまった。

「ごめんアルト。僕はとてもそこに行けそうにない」

「気持ちは分かるから落ち着きなさい。万が一の事が起こったら私が助けてあげるから」

それを聞いてしぶしぶと諦める僕。

フィナっていうのはリィゾと同じでアルトの護衛の騎士なんだけど……その、とにかく僕はフィナが苦手だ。千年城で暮らしていたときに、同性なのに僕の着替えをハァハァ言いながらガン見してたり、お風呂に入ってるといきなり入ってきて襲われそうになったり……その他色々あるけど思い出したくない。

その度にアルトやリィゾに僕は救われていた。

「それより明久。お姫様をエスコートする時にすることは何かしら？」

良い笑顔でこちらを振り返るアルトに、僕はため息を一つつくと、

「了解です。しっかりとつかまっていてくださいね、姫」

そのまま彼女を抱き上げ、両脚に強化魔術をかけ千年城に向かって屋根の上を駆け上げた。

第6話　戦いに勝利などいらない

日も静まり返った深夜の森。その奥地にそびえている古城の前、そこには白と黒の対となる双剣を手に、同じく数歩離れた所に黒の長剣を手にして向き合っている者がいた。

片や死徒の姫の護衛の騎士であり死徒でもある吉井明久。

そして対峙しているのは同じく死徒の姫の護衛の騎士であり――そして、27祖の第六位にまで君臨しているリィゾ＝バール・シュトラウトである。

対峙してから幾分も経っているというのに、二人は動かなかった。

双の剣をだらりと足らしているのにつけいる隙が見えない明久の構え。

反対に上段に構え、何時でも剣を振り抜ける構えをしたリィゾ。こちらは明久とは反対に攻撃の構えをしている。

対となる構えをとる二人を中心に殺気が急速に張りつめ、周囲を満たしていく。

そよ風により主の木からはぐれた木の葉が一枚――その中心に軽やかに舞い降り、そしてふわりと地面に着地する。

そんな些細な事が契機となったのか、瞬間、リィゾが砕くように地面を蹴り明久に肉薄すし漆黒の剣を振り抜いた。

――――――

「ただいま」

久しぶりに千年城にやって来た明久は、その外壁から庭園、雰囲気と何から何まで変わらぬ自分のもう一つの住まいを見て胸が温かくなるのを感じた。
住んでいたのは一年弱。それからは旅に出て、ここに暮らすことなど無かったのではあるが、それでも明久にとってそれほど印象深い場所だったのだ。

「クゥン……」
「ただいま、プライミッツ。長い間会えなくてごめんね」

中に入ると、瞬きする間に前には巨大な白い犬が現れ明久へと擦り寄ってくる。
といってもただの犬では無い。その瞳には人間ならば見つめられただけで錯乱されそうな程に死の気配と殺意が渦巻いている。
第一位のガイアの魔犬にはそれほどの神秘に近いような自然現象が秘められている。
この魔犬は死徒の姫であるアルトルージュを除けば人どころか、人外にも懐くことなどないのだが、明久には心を許していた。

「プライミッツったら、ずっと寂しそうにしていたのよ」
「そんなに僕を待ってくれてたんだ。ありがと、プライミッツ」

明久は柔和な微笑を浮かべて愛しそうにプライミッツを撫でていたのだが、ゾクリと背筋を撫でるような気味の悪い感覚に襲われ、それが何かを考えるより先に本能的に飛びずさった。
すると先ほどまで明久がいた場所に凄まじい音を響かせながら着地する白い騎士一名。

……なんかハァハァ言ってる。

「おかえりぃん明久ぁ♪」
「あぁうん、ただいま。そして地獄に落ちろ、フィナ」

体をくねくねさせながら出迎えてくれたフィナに明久は帰宅の挨拶&永遠の罵倒を浴びせる。
ありったけの殺気を放っていたのだが表情は引き吊ってる辺り、余程苦手なんだろう。

フィナ＝ヴラド・スヴェルテンは美少年・ショタ好きな吸血鬼として有名である。
さらに加えて同性からしか血を吸わない変態としても一目置かれている。

ここで重要な事が一つ。
吉井明久はカッコいいとも言えるような容姿は持っていないが、代わりに傍から見れば美少女にも間違われそうな女顔負けの中性的容姿を備えている。
そんな彼が引き吊った表情を浮かべても、頭のイカれた白騎士にはそれが魅惑の笑みにしか見えないわけで

「それは僕を誘ってるんだね!?」
「なんでさっ!?」
「何も言わなくていい。今こそ僕と本懐を遂げよう!!」
「いやぁぁぁあああ!!??」

ほら、こうなってしまう。
堪らず助けを求めて頼りになるアルトとリィゾを見る。しかし二人は所用があったみたいでそこに姿は見えなかった。

……呪うぞ運命。

そう明久は自分の不幸値を嘆いたそうだ。　とにかく自分の貞操を奪われないように、干将・莫耶で身を守りながら方法を探し出す。

―――何もない広間。ハァハァ言ってるフィナ。鼻を鳴らして僕を見てるプライミッツ。

―――何もない広間。鼻穴を大きくしてるフィナ。お座りして僕を見てるプライミッツ。

―――何もない広間。両腕を広げ始めたフィナ。愛らしい顔で僕を見つめるプライミッツ。

……あ。

「(フィナを) 殺れ、プライミッツ」
「ガウッ!!」
「グボォア!?」

何で気づかなかったんだろう。
明久は良くやったとプライミッツを撫でながら深くため息をついた。

「む、その双剣と戦法はどこで手に入れた？明久」

何時の間にいたのか、振り向いた先には僅かに目を見開いて驚きの表情を浮かべていた。

……なんか、ややこしい事になってきた。

「……企業秘密ってのは？」

「当然却下だ。お前の剣の師として聞き出すぞ」

「……分かったよ。一先ず先に料理作っておくからさ、それを食べている時にでも話すさ」

とりあえず、夕飯……作ろう。

明久は夕飯作るべく厨房へと姿を消した。

「成る程……投影魔術、か」

リィゾは上品に料理をつまみながら、そして顎に手を添えて呟く。その眉間には少し皺が寄っていた。

隣にいるアルトも同じように難しい表情をしている。心なしか僕を睨んでいるような気がする。

「明久……その魔術、決して協会には見せないこと。良いわね」

「……それは分かってるよ」

「何故だ？お前が魔術を使えるってこと自体も初めて知ったのだが……まあいい。それを入れた上でも明久もその分野に関しては素人だろうに」

……悪かったね。

どうせ僕は何を選んでも一流にはなれないんだから。

その事に関しては自分が一番理解してる。

そしてこの投影魔術についても、だ。

「平行世界に行ったときに、もう一人の師である人から教えてもらったんだ」

「ちょっと待ちなさい明久。あなた今、平行世界って言った？」

「…？言ったけど」

「何故強化と投影しか使えないあなたが平行世界に行けたのよ」

「え？ゼル爺から手紙届いてなかった？」

「ゼル爺から？手紙？」

「そ、手紙」

そこでアルトは過去の記憶を振り返ってみた。

しばらく探っているうちに、明久がいなくなる前日に彼の机にあった魔法使いからの手紙を映像として捉える。

『元気にしとるかアルトルージュ？出来ればアルクェイドとも仲良くやって欲しいものじゃが……もうそれは諦めたわい。そうそう、お前さんとこの明久という子供。中々に気に入ったわい。しばらくこちらで預からせてもらうから宜しく頼むぞい』

「あれかぁぁぁぁぁ!!!!」

一瞬、千年城に姫の叫びが木霊したという。

思わず頭を抱えているアルトルージュを他所に、リィゾは未だに目を細めて明久を睨んでいる。

「つまりアレか？お前は私以外の者にも師と称しているものがいて、さらにその者からも剣術を教わっていたと？」

「うん」

「ほぅ…」

リィゾの目がすっと細まる。
おや？なんだか雲行きが怪しくなってきたぞ。
ここは機嫌を損ねないようにおだてないと。

「その人もリィゾと同じくらい尊敬してるよ」
「よし、確かめてやるから外に出ろ」

逆に機嫌を悪くさせてしまったみたいだ。

「ちなみに拒否権は？」
「無い。実を言うとお前がどれくらい強くなったかこの身で確認するのが楽しみなんでな」

ニヤリ、と女性なのにゾッとする笑みを浮かべる黒騎士。
この時明久は「あ、これ死んだな」と

そしてまた撃鉄音が一つ響く。
双方一度も引くことなく、剣戟を繰り返していた。リィゾが地を蹴り凄まじい速度で明久に魔剣を斬り込む。それを明久は滑らすように莫耶で弾き、外へと威力を霧散させる。
元々明久には彼女の剣撃を受け止められる程の筋力を有していない。例え肉体強化していてもだ。
故に一撃一撃をいなすように弾くしか、彼には防御する術がない。

「……せぃっ！」

合間をぬって干将で袈裟斬りを繰り出すが、リィゾは後方に跳躍し

それを難なく避けた。

「自らは攻めこまず、常に守りに徹する型……それがお前の剣か」

「攻めも勿論いれるよ。だけど護りこそが僕の型なんだ」

「そうか。だが、それでは何も決定打をいれることはできないぞ」

「……あの人が教えてくれたんだ」

再度繰り出された剣撃……それを双剣を交差させ受け止める。足元の地が窪み、両腕の毛細血管が破裂し、筋肉が幾度となく悲鳴を上げるが、明久は歯を食いしばって耐えきる。

目を閉じた彼の瞳に映るは赤の騎士。

正義の味方を志し、只一人で数多の人間を救うべく世界を、戦場を駆け抜けた男。

最後には救った人間に裏切られ殺された救いようのない運命だったが、明久には彼が羨ましく思えた。そして瞳を開ける。

「僕達のようなものには『勝利』なんて一度も無くていい。ただ目の届く人達を救える力を持て……てねっ!!」

渾身の力をもって、彼女の剣を弾き後ろに跳躍し莫耶を投擲する。

そして明久自身も干将を構え、距離を詰めた。

「あれは……」

アルトルージュはこれには見覚えがあった。

かの召喚獣勝負の時に明久が自分へと仕掛けた剣技だからだ。だとしたらあの剣は戻ってくるはず。

何時の間にか、莫耶を再度投影していた明久はリィゾの動きを双方で押さえ込んだ。

そしてニィ…と唇を吊り上がらせる。

後方から黒騎士の背中を刺さんと迫ってくる莫耶。それを――

「甘いッ!!」

リィゾは更に押し込むようにして避けることもせず前に踏み出し、明久ごと押し倒す。

行き場の失った刀はそのまま二人の上を通過し、そして姿を消した。

「いっ……。やっぱり勝てないや」

「いいや。確かにお前の負けだが……この勝負、私も勝った気がしない」

頭を押さえている明久に、リィゾは手を差し出して起き上がらせる。

先ほどまで剣呑に満ちていた彼女の瞳からはそれが消え、今は穏やかな色を称えていた。

「お前の言う師とやらは……理想を叶えられたのか？」

「ううん。…でも、もう後悔だけはしていないと思う」

「そうか。久々に剣を交えて分かった。確かにお前の剣に勝利などいらない。……いるのは守りの剣だけだとな」

――会ってみたいものだ。お前がそれほどまでに尊敬する師とやらを――

空を仰いで呟いたリィゾの顔は、月日に照らされて本当に綺麗だった。

第7話

明久は考えていた。
自身と同じ姫の騎士、リィゾを連れ冬木の商店街を回りながら何やら唸っているようだ。
とは言っても今日の夕飯のメニューを何にしようかと食材店を巡って悩んでいるだけなのだが。
リィゾを連れてきたのは料理ができ、明久と共にメニューを考える仲だからだ。アルトに関しては料理は丸っきりダメで、フィナも出来ないことはない……ないのだが明久なら絶対に連れていかない。

しばらく歩き回ったところで昼になった。
大通りに出て昼食を摂るために近くのハンバーガー店に入る。

「明久……こんな安物の店など私は断固反対する！」

そう言って不満そうな表情を浮かべるリィゾが僕に詰め寄ってきた。
確かに、庶民的でリィゾのような騎士が食べるのに反対的な気持ちも分かるけどさ……。

……いや待て。

「こうなったのもリィゾが遠慮しないせいで食費が尽きかけてるからじゃないかっ!!」
「ウッ……」

忘れてたとは言わせない。
明久の作った物は美味だな――そう言って次々と食べていたこと

を。
初めのうちはとても幸せそうな顔して食べるものだから彼としても嬉しかった。
……それが限度を越えなかったら。
結果として、蓄えられていた今月分の食材が殆んど尽きてしまった。
すっからかんになった食材庫を見た時の明久は号泣していたという。

食事面の事に関した時の明久は鬼になる事がある。故に「食費が……」と悲壮にくれる彼の呟きを聞いて、異議を唱えるほどリィゾは命知らずではなかった。
注文した品が載ったトレイを店内のテーブルに置いて、椅子に座る。
どこか落ち着けるようにと、明久は端の席の方を選んでいたのだが、無駄な徒労に終わったようだ。その違和感に気づいたリィゾが顔をしかめる。

「……明久。何故か私達、注目を集めてはいないか？」
「は？リィゾ、気づいてなかったの？」
何がだ？
――――ふむ。成る程な。
しばらく思考を巡らせていた彼女は、何かに気づいたのか頷く。
確かに、この町に外国人というのは珍しかろう。おまけに女性の身としてこの言葉使いといったことだから尚の事だろう。納得がいく。
「……ふむ、確かにこの言葉使いは何とかせねばならんな」
「ああうん。それもあるか」

何故そこで呆れた目で見られなければいけないのか？
そう、リィゾは首を傾げた。

「？　他に何かあるのか」
「はぁ……。分かってないようだから言っとくよ、リィゾって綺麗なんだよ」
「はぁ……」

綺麗――と言うことにピンとこないのか首を傾げたままのリィゾ。
「何ていうかさ……クールビューティって言うのかな？　それに似合うその口調だから余計人目につくんだ」
「そう、なのか？」

それでも微妙な表情を浮かべている彼女を見て明久はため息を吐いた。
遥か過去から騎士として身を置いてきたリィゾは、強くあれといった事などしか考えていなかったためか、自分を良く魅せようまたは魅られようといった美的感覚とは丸っきり無縁だった。
明久に言われたことに関して考えることを放棄したらしい彼女が口にした事は

「それを言ったらお前も愛らしさから人目を集めているぞ」
「何それ嬉しくない」

他の人へと話題を移すためのものだった。
明久は露骨に不機嫌な顔をする。
男なのに愛らしいなんて言われてるから当然の反応ではある。そんな明久に気づいていないのかリィゾはクックッと笑い続けていた。

「まあ人目につくってのも僕らとしての立場上戴けないし、そろそろ別の場所を見て回ろうか」

「おや？」
「んあ？」

言葉は違うがこめられた意味が全く同じな反応で出くわす面子。
明久、リィゾと雄二、翔子である。

「奇遇だね、雄二。ここに何か用でも……って聞くだけ無駄か。デートに決まってるもんね」
「待て、確かに出かけてはいるが別にデートじゃないからな」

出会って早々話が噛み合わなくなっている二人を余所に女性の方はしばらく無言で見つめあっていた。そして翔子が口を開く。

「……明久、浮気はダメ」
「へ？」

突然の事で理解が追いつかずキョトンとした顔になる。
翔子は元々物静かであまり喋らないタイプなため、前提を飛ばして核心に入ったものだから明久の反応は当然と言えば当然だ。

「えーと、霧島さん？　浮気ってどういう事」
「……？」

何で分からないのかって首を傾げながらリィゾの方に視線を向ける翔子に、やっとその意味を理解した。
と同時に改めて彼女がこういう人である事を思いだし明久は苦笑

いする。

「違うよ霧島さん。彼女はリィゾ。雄二はもう知ってる筈だけど僕と同じアルトの護衛の騎士の一人なんだ」

「あー、そういやそんな話してたな……」

その顔は……さては疑ってるね雄二。

まあ確かに今どき騎士っていうワードを使うこと自体胡散臭く感じるのかもしれない。

でも現在でいうような『ＳＰ』とか『警護官』といった風に銃火器を使うわけでもなく、剣や魔術を基本とした武術を使うから騎士以外言いようが無いんだよね。

それにそんな反応されたら黙ってない人も隣にいるし、

「ほう？　ならば雄二とやら、一度私と手合わせしてみるか？　別に貴様の得意そうな肉弾戦でも構わん」

「……大した自信だな」

自分の得意とする『喧嘩』でも構わないとするリィゾに触発されたのか雄二の目がスッと細まる。

あ、いけない。

こいつ乗り気になってきてる。

どんなに自分の強さに自信があったとしても只の人間では勝ち目なんか無いというのに。

ここは一つ。分かりやすい例えを教えてあげなくては。

「雄二雄二」

「あん？」

「リィゾって僕より強いから」

「それを先に言えっ!!?」

良かった。
どうやら分かってくれたみたいだ。
大切な友人をまた一人、救うことができて明久はほっと胸を撫で下ろしたのだった。

「成る程な。今日の夕飯の食材を、ね」
文月学園周辺の食材店を出た所で、雄二が納得したように僕らが手に掲げている袋を見て頷いた。その中には和風から洋風まで幅広く料理できるようにと多種多様な食材が詰め込まれていた。
「うん。アルトの大好きな物も買えたし雄二達に会えて良かったかな」
そう言って逆の手に掲げている白い箱を上げる明久。ラベルには洋風ケーキの品名が記されていた。
「気に入ってもらえて良かった。そこは俺と翔子が良く通っている洋菓子店だからな」
「……そこまで来てどうしてデートじゃないって言い張るのかね…」
「ん、なんか言ったか？」
「なんにも。「…明久」うん、気づいてるよリィゾ。じゃ、そろそろ僕達は帰るよ。後ろから僕達をつけている人がいるみたいだし」
（……つけている？　はぁ…成る程な）

後ろを振り返った二人は明久とリィゾの言っていた意味を理解した。
四軒程後ろの方から、ドス黒いオーラを纏いながら接近して来る者二名。
姫路と島田である。
その手には鋭利な刃物と血に染まった釘バットが握られているが、その血が誰のものなのかは伏せておく。

「……あの二人は反省もしない…！」

翔子は呆れ返っていたが、その声には怒気が含まれており今にもあの二人に向かって行きそうだった。

「まあ待て翔子」
「でも！」
「落ち着けって。俺らが手を出さなくてもあの二人なら大丈夫。お前も分かるだろ？」
「……うん」

そこまで言って翔子はようやく身体の力を抜いた。
明久の規格外を分かっているからこそだ。アイツの実力なら姫路達を撒くことぐらいわけない。
もう一人いたリィゾっていうのは分からないが、アイツが自分より強いっていうくらいだから大丈夫なんだろう。

案の定、明久達は角を曲がるとすぐに側の家に跳躍して飛び乗った。
後をつけていた姫路達はその時点でアイツらを見失いそのまま来た道を引き返していった。
明久は屋根から俺達に向かって笑顔で頷くと

「っし！このまま家まで競争だリィゾ!!」

そのまま屋根から屋根へと駆け抜け走り出す。

「やれやれ……子供かアイツは。だがまあ、昔に比べて随分と笑うようになったがな」

口調こそは呆れているが、リィゾは母のように微笑を浮かべていた。そして俺達に向き直り

「これからも明久の事を宜しく頼むぞ」

それだけ言って、そのまま同じように明久を追いかけていった。まるで風のようにどんどん見えなくなっていく二人を見て

「…何ていうか、ほんと規格外だよな」

「……うん」

後に残された俺達はただただ、そう呟くしかなかった。

第8話

清涼祭。
それは文月学園における年に一度の行事で、それぞれのクラスが出し物をし、アピールをする重要な機会である。
そのため、今日の文月学園は準備のため、いつもより忙しさで賑わっていた。

――――その頃、Ｆクラスはというと。

「さあこい須川。お前のボールなんか場外にしてやるっ！」
「抜かせ！一球たりとも掠らせなんかさせねぇぜ」

――――野球をしていた。

それを2年のＦクラスから見ていた、残りの真面目組――特に坂本雄二、吉井明久の二人は頭を抱えていた。
それもそうであろう。
世間から見て、文月学園のＦクラスは劣悪な環境故にとてつもなく評価を悪く捉えられている。
無論、これはこの学園には欠かせない階級制度なので仕方がないといえば仕方がないのであるが、それを取っても今年の2年Ｆクラスは異端審問会などという組織を立ち上げ、迷惑をかけてばかりで最悪なのだ。
そんな悪評価を見直してもらえる絶好の機会だというのにこのやる気の無さ。
何も感じない方がどうかしてる。

ここで一つ。
そんな者達のために、この学園には抑止力という存在がいる。
――――それは

「貴様らっ、何をやっとるか！」
「げぇ!?　鉄人！」

この学園の補習担当教師、西村宗一――通称『鉄人』である。

「誰が鉄人か、馬鹿者が！須川、貴様が首謀者か」
「違います、吉井と坂本の立案です」

さらりと無関係な者に罪をなすりつけるあたり、須川はある意味凄い人物なのかもしれない。

（アイツ……後でミンチな）
（泰山麻婆食わせてやる）

……後の悲劇を知ってさえいればだが。

「見え見えの嘘を吐くな！吉井と坂本は教室におるわ！」
「「バカな――っ!!??」」
「どうしてそんなに驚いた表情が出来るんだ!?　いいから早く戻れっ！　未だに準備を始めてないクラスはお前らだけだぞ！」

このすぐ後、逃げ回っていた男子は一人残らず掴まり、西村先生に担がれ教室に連れ戻されたという。
……西村先生、あなたは人間ですか？

「んじゃ、クラスの出し物を決めるぞ。書記は明久、頼めるか？」
「ん、了解」
　教室に生徒全員が揃ったことだし、雄二は壇に出て率先し、明久は書記のために隣に立つ。
「何か希望があるものは挙手しろ……ん、なんだ姫路」
「ウェディング喫茶なんて良いと思います。ウェイトレスがウェディングドレスを着るんです」
「……悪くはないと思うが、結構な額がかかるんじゃないか？まぁ一応書いておいてくれ。他、ムッツリーニ」
　えーと、ウェディング喫茶。コストが高い？
「……写真館」
「あー……どんな？」
「……秘密」
「却下だ」
　彼の言う写真館は色々と危険な香りがする。雄二の言う通り、この意見は書かないでおこう。
「他には……須川」
「俺は中華喫茶を希望する。簡単な飲茶を出したりするんだ」
「……今までで一番妥当な出し物だな。明久もそう思わないか？」
「うん、僕もこれで良いと思うよ。ただ…それに少し欧風も付け加えたいかな」
「（ガラッ）順調に進んでいるか？」
　と、そこで様子を見にきたのか西村先生が教室に入ってきた。

「今、二通りの案が出てきた所です」

――ウェディング喫茶（出費の難有り）――

――中欧喫茶――

「……中欧喫茶というのは何だ？」

あ、やっぱり分かりづらいか。

「ただ単に中華だけだと味気が無いので、少しばかり欧米の物も取り入れたら――と思っての事です」

「成る程。良いかも知れんな。この調子でいくように」

先生はふむ、と頷くと再び教室を後にする。

わざわざ様子を見に来てくれたのか。

周りの皆は自覚してないけど、普通これだけ面倒を見てくれる教師はそうそういない。

これは感謝しておかなくてはいけない。

「ウェディング喫茶も悪くは無いが出費が高すぎる。だからここは須川と明久の意見を合わせた中欧喫茶で行くがそれでいいか？」

全員の肯定を以てして、Ｆクラスの出し物は中欧喫茶に決定した。

そしてこの時僕は気づいていなかった。

この学園に、僕の日常を一層賑やかにさせる――新たな刺客がやって来ることを。

第9話

「ようこそ。中欧喫茶へ！」

文月学園で清涼祭が開催し、各クラスが出し物で賑わっている中、Fクラスも先日決まった喫茶を開き、教室改善費のために一丸となっていた。

何故、教室改善費が出てくるのかと言うと……飾り付けをする際、教室の清掃をしていた事によって、畳の八割が腐れ爛れていた事が発覚したからだ。

代表である雄二は、それを見つけ次第すぐに学園長に改修の要求を伝えに行ったが、それは叶わなかった。

学園長とて改修してやりたいのは山々だったのだが、一度決めた格差制度をそうあっさりと覆してしまっては他クラスに示しがつかないのだ。

無論ここで引き下がるようでは、雄二は過去に神童とは称されなかっただろう。

十八番の交渉術を巧みに駆使し、結果、清涼祭で稼いだ額を改善費に費やしてもいいと何とか許可を得られたのだ。

この事を伝えることによって、クラス全員が活気づき出し、その成果あってか現在のFクラスは予想以上に客足が増えていた。

これも彼らの努力によるお陰なのではあるが

（まあ、それだけじゃないんだよな……）

雄二はある一点を、ただただ苦笑しながら見つめていた。

「お待たせしました、お嬢様。ご注文のスリーピングジンジャーで

ございます」
「あ、ありがとう……っ」
「只今から湯を注ぎますので、熱の冷めぬうちにお飲みいただきますよう」
「――っっ！」

そこには執事姿をした明久が、目前の客のカップに湯を注ぎ込んでいるのが見えた。
それだけならそこまで周囲から視線を集める事は無かったであろう。
……そう、彼が素人であったならば。

だが明久は素人などでは無かった。
彼の紅茶を蒸す姿は――そう、洗練されていた。
まるで何処ぞの名門貴族に属していた執事かのように、茶葉を蒸す所から湯を注ぎ込む姿までが完成された動作だったのだ。
ここまでくれば当然だが、客をもてなす立ち振舞いも丁寧で、案の定、当の客は顔を真っ赤に染め明久の顔を見つめていた。

「一体何処から修得して来たんだか…」
「……同感。料理もだけど明久のは既に学生の域を超えている」
「確かに……な。けどよ、これだけは分かる。あれは才能なんかじゃない。血の滲むような努力があってこその技量だな」

そんな会話が交わされている事を知っているのかいないのか、次々と行をこなす明久は、一人、また一人と女性を陥落させていった。
この様子では、姫路と島田の二名は当然黙っていないのだが、そこは悪鬼羅刹の強さを誇る雄二が目を離さなかった為、有事に至ることは無かった。

その時、緋色の髪をした女性がこの教室に入ってくる。

明久は何故かそれが誰かが気になってしまい、視線を移し

（うげっ!?）

心の中で盛大に悲鳴を上げ、教室の出口へ全力ダッシュ。
当の彼女もそんな明久に気付き

「何処に行くのよ？　明久」

目にも止まらぬ速さで彼の襟首を掴んでいた。
あまりにも懐かしき声に、明久は冷や汗を浮かべながら、ギギギ――と音をたてて首を向ける。

「ひ、久しぶりだね……青子」
「うん、久しぶり。――じゃないわっ!?　貴方あれから何処に消えてたのよ！」
「は、はは……ちょっとね。（不機嫌そうな表情は相変わらずだね……）」

五年前の彼女の面影がそのまんま今でも感じられたのが嬉しかったのか、つい顔を綻ばせてしまう。
このままだと自分に危険が及ぶので、彼女と別れてからの事を、他の人には聴こえないように彼女に明かすと

「あの宝石爺、本当滅茶苦茶ね……」
「でしょう？」

聞いていて頭が痛いとでも言うように、額を手で押さえはじめた。
明久はうんうんと頷く。

「明久、その人は？」

そこに雄二がやって来る。

「紹介するね。幼なじみの蒼崎青子……あ！フルネームで呼ばないでね。それ言うと怒っちゃうから」

「よろしく。呼びたいなら苗字で呼んでね。フルネームで呼んだら……殺すから」

「お、おう……」

やけにフルネームを強調して自己紹介する青子の迫力に、雄二は一歩後ずさって頷く。

と、そこで何かを感じたのか明久が横に首を傾けると、すぐ側を拳が通り抜けた。

「いきなり殴りかかってくるなんて女の子のする事じゃないよ。島田さん？」

「あんたはいつもいつも避けて…！　大人しく殴られなさいよ」

「美波ちゃんの言う通りです！」

どうして明久と島田達の会話は成立する事が無いのだろうか？

「君達、自分の言ってる意味分か「明久。言うだけ無駄だ」…雄二？」

「それよりこれから召喚大会行かないといけないだろ」

召喚大会。

それは清涼祭の名物イベントで、文月学園を世間にアピールする重要な行事である。

雄二は学園長に改修の許可を貰ったが、それには条件があった。

———それは召喚大会で優勝する事。

ただ、この召喚大会はタッグでの戦闘なので明久に協力してもらうことになったのだ。
無論、そうなった事情は包み隠さず話した。

「そういえばそうだったね」

明久は難しい顔をすると

「だけどさ、雄二。そんな条件出されて何かオカシイとは思わなかったの？」
「おかしい……だと？」
「そ。そもそも必要最低限の設備は法律に定められてるんだし、それを学園が拒めるわけがないじゃん」
「そういえばそうだな。　となると、何かあるのだろうが……どうせ教えちゃくれねえだろ。行こうぜ」
「そうだね。青子も見においでよ」

振り返って、島田達の明久への攻撃を一つ残らず受け止めている青子にも呼び掛ける。
二人の首筋に手を添え、軽い魔術をかけて気絶させた彼女は

「そうね。この学園の事もまだ知らないしそうさせてもらうわ」

更に二人が身動きできないように縄で束縛した。
結構な性格破綻者である。

「それでは召喚大会第一回戦を始めたいと思います」

「頑張ろうね、律子」
「そうだね、真由美」

向こうから仲睦まじく出てきた二人は、頷き合うと召喚獣を召喚する。
現れたのはランスとハンマーが武器の、なのに可愛らしい召喚獣。

「頑張ろうね、アキちゃん」
「殺すよ」
「……ノリだ。本気にするな」

対峙して不敵な笑みを浮かべている雄二と、不機嫌な表情を浮かべている明久。
…早速噛み合っていなかった。
召喚して現れたのは、薄い防具の上に青の外套を羽織った無手である明久の召喚獣と、白い改造学ランに武器が深紅の手甲である雄二の召喚獣。
と、そこで明久が瞳を閉じ

「――投影（トレース）・開始（オン）」

使い慣れた自己暗示の詠唱を紡ぐ。
すると召喚獣の手元が輝き、現れたのは

「……弓？」

そう、和洋を合成させたような……漆黒の弓だった。

「武器が剣だけだなんて言ってないよ」
「そういやお前弓も得意だったな。一年の弓道の大会で県大会優勝

してたし」
「……その後怪我して棄権したけどね」
深くため息をつくと、流れるように弓を構える。
「それでは始めてください！」
「律子！」
「真由美！」
「「行くわよ!!」」
開始の合図と共に、息ピッタリで突攻する二人。
（うーん。息は合ってるんだけど、戦い方は素人だね……）
それを明久は苦笑しながら、足下に弓を放ち動きを止めると
「おらぁ！」
雄二が右ストレートで片方を弾き飛ばし、一対一に戦局を持ち込んだ。
こうなってしまえば、操作に慣れていないＢクラスに勝機は少ないだろう。
ハンマーと手甲。
どちらが接近戦で有利かは、重量で振りずらいハンマーよりは軽くて的確にダメージを負わせられる手甲に決まっている。
真由美の召喚獣は雄二の召喚獣に有効打を与えられないまま消滅した。
一方明久と律子の勝負は一瞬で決着がついていた。

「……フッ!!」
「……嘘…」

ふわりと地を跳躍した明久の召喚獣は弓を構え、律子の召喚獣に向けて弾丸のように連射したのだ。
狙いは一つ一つが正確。
腕、足、そして頭。
そのどれもに寸分違わずに中(あた)り、律子の召喚獣は光の粒子となって消滅したのだ。

「勝者、Fクラス　坂本雄二　&　吉井明久ペア!!」

こうして召喚大会第一回戦は幕を閉じた。

第１０話

「……営業妨害、ねぇ」

一回戦を終え教室に帰ってくると、何やら騒がしかったので、扉の前にいた秀吉に事情を聞いてみたところ、どうやら三年生の二人が大声でＦクラスの悪口を言っているらしかった。

「…受験で忙しい先輩様がご苦労なこった。こりゃ何か裏があるな」

雄二がため息を吐きながら、教室の奥にいる坊主とモヒカンの上級生を見やる。

「ま、どちらにせよ締め出すとするか。アイツらも殺気だってるようだし」

見れば周りで働いているＦクラス男子達から、尋常ではない殺気が放たれ始めている。

中にはフードを被り鈍器や刃物を手にしている者が見え始めているため、そろそろ場を納めた方が良いだろう。

ネクタイを緩めはじめた雄二を明久は手で制した。

「だめだよ。暴力じゃ事態を悪化させるだけ。穏便にいかないと」

「その後の対策も考えてはあるんだがな…。まあお前に任せるとするか」

どちらにせよ真っ当な対策じゃないと思う。

そう思いながら明久は教室の奥へと足を進めた。

「お客様」
「「あぁ？」」
「他のお客様の御迷惑になっています故、どうかもう少しお静かにお願いします」
「はあ？本当の事を言って何が悪いんだよ」
「その『他のお客様』の為を思ってこうしてやってるんだぜ。有り難く思え」

ペコリとお辞儀し、懇切丁寧な明久のお願いを常夏は一蹴。
明久の額から青筋が一筋裂ける音がした。

「――――お客様」
「しっつこいぞ！不味いもんは」
「――お休みなさい。そして逝ってらっしゃいませ」

我慢限界。
流れるような手つきで二人の首筋に手を添え、軽い魔術をかけ失神させると教室の窓を全開し

――――ブォン

三階に向かってぶん投げた。

「……あれの何処が穏便だ？」

雄二の呆れにも似た呟きを代弁するかのように、二人は風を切るような音を唸らせながら、吸い込まれるように三年生Ａクラスの窓に入っていき

――バキバキバキッッッ！ドグシャッ!!

（ん？なんか嫌な音が聞こえてきたような…）

――ような、ではない。

明らかに聞こえていたのだ。

机を次々と薙ぎ倒し、壁に激突するような音が。

それを明久は『ま、大丈夫じゃない？悪運強そうだし』の一言で万事解決。

……意外と黒い。

「しっかし、あれほど不真面目な奴らも困り者だよなぁ」

「だよな。こんなにも真面目者の俺達を見習えってんだ」

まるで他人事のように先ほどの先輩達を非難する――須川と武藤。

と、そこで彼らの肩をつついたものがいたので振り返ると

「ん、どうしたんだ吉井？　変な格好して。毒ガス現場にでも向かうつもりか？」

「ていうか何だそりゃ。麻婆か？」

そこには、ゴーグルとマスクをガッチリと装着し、ゴム手袋を着用した完全防備を施した明久が、赤く煮えたぎった麻婆を手に立っていた。

「うん。僕の得意料理を作ってみたんだけど、ちょっと二人に味見してもらおうと思って」

「俺達に？それは嬉しいが……その、な」

「何かグロテスクな赤色してるんだが…」

その表現は正しいと思う。
唐辛子とラー油のみで煮込んだルーに豆腐を投入しただけのシンプルな麻婆。
だが……真っ赤な液体の中で浮き彫り見える白い豆腐は、その…血の海地獄に浮いている人骨を連想させた。
その名も外道マーボー。

「大丈夫だって。知り合い(外道神父)も美味しいって次々と頬張ってたからさ」
「そうだな。じゃあ一口だけでも（パクっ）」
「ああ（パクっ）」

「「……（ゴシャ!!）」」

その一口が命取り。
瞬間、二人の身体を激辛という名の電撃が迸り、一瞬の内に意識を刈り取られてしまった。

「僕に罪を擦り付けようとしたこと……まさか忘れたわけじゃないよね？」

マーボーに顔を突っ伏したまま動かない二人を濁った泥のような瞳で見下ろす明久。
悪事は必ず己に帰ってくるというのは本当のようだ。
実を言うと、この日の為にとあれから明久は唐辛子とラー油を何日もかけてじっくりと煮込んでいたのだ。
優しそうな外見だけに囚われていると痛い目を見る事を忘れてはならない。

「そ、それって……泰山麻婆？」

後ろから恐怖に震えたような声が聞こえてきたので振り返ると、小学生くらいの女の子を連れた青子が顔を真っ青にしてこちらを見ていた。
アルトに会いに行ってくるって言ってAクラスに行ってたんだけど帰ってきたようだ。

「うん。完璧に再現できてるでしょ？　英雄王（金ピカ）さんもこれのお陰で盟友（エンキドゥ）に会えたって泣いてたよ♪」
「英霊にダメージ与えるなんてもう宝具の域ね……」

それは大変だ。
無いとは思うけど、万が一僕が英霊になった時の宝具にこれが登録されることのないように、須川君辺りにでもレシピを押し付けて記憶を消去しておこう。

「所でその娘は？」
「うん、それなんだけどね。何か姉を探してるみたいだったから一緒に探してあげてたのよ」
「そう。君、お名前は？」
「ハイです。葉月と言うです！」

女の子は頭の茶髪のツインテールをぴょこぴょこと揺らし、元気に挨拶した。

「そっか。よろしくね、葉月ちゃん。葉月ちゃんはお姉ちゃんを探してるようだけど、名前は何て言うのかな」
「ミナミお姉ちゃんです」
「あれ？どうしてここにいるの葉月？」

その声を聞いたとたん、思わず顔をひきつらせてしまった。

葉月ちゃんの言うミナミとは美波の事を言っているのだろう。
よくよく見れば、素直そうな顔に見える活気そうな瞳や茶髪は美波とそっくりではないか。

「……性格は全く似てないわね」
「…何か言った？」
「何にも」

何だろう。
青子と美波の仲がとてつもなく悪い気がする。

「それより明久はAクラスに行ってあげなよ。アルトが待っているわよ」
「アキ……？」

どうして恋人に会いに行くだけでここまでも睨まれなければならないのだろうか？
いや、ここにも恋人はいるんだけども。
まあ青子がいる限り美波も手が出せないだろうし行くか。
Aクラスだから当然霧島さんもいるだろうし、僕は嫌がっている雄二を引き摺りながらFクラスを後にした。
そして当然のように美波と姫路さんを気絶させた青子も後から着いてきた。

「……ムッツリーニ。何してんの？」

「……偵察」
「いや、清涼祭に偵察も何もないよね」
Ａクラスに着いたとき、扉前で身を屈めてシャッターをきっているムッツリーニを見かけた。
仮に偵察だとしてもあんなローアングルからは撮らないだろう。
「……アルトルージュの膝写真、一枚５００円」
「そうだね。全部没収するから」
「……そ、そんな！」
てか人の恋人の写真を売らないで。
押収した写真をポケットに押し込みながら、Ａクラスに入っていった。

「いらっしゃいませ、ご主人様」
中に入ると、メイド服を着た優子さんと霧島さんが出迎えてくれた。
こうして見てみると優子さんには優子さんなりの魅力があるから、秀吉とはもう間違えないや。
そんな事を考えていると、彼女の後ろから霧島さんがひょこっと現れて
「……いらっしゃいませ。今夜は帰らせません、ダーリン♪」
「今帰ってもいいか……」
「お姉さん。夜も帰らないのですか？」

「葉月ちゃんはまだ知らなくていいからね」

無意識にこんな発言するから霧島にも困った所がある。
何やら騒々しくなっているので奥を見ると、アルトが周りに集まっているであろうお客をかき分けて此方に向かってくるのが見えた。

「来てくれたのね、明久」
「当たり前でしょ。淑女をエスコートするのは殿方の役目って言ったのはアルトなんだから」
「それもそうね。ふふ」

……何だろう。
すっごく周りから僕を射殺すような視線を感じる。

『このクラスは良いよなぁ！』
『ほんと。Fクラスの不味い出し物とは大違いだぜ！』

……ええと。
何て言えばいいのやら。
兎に角、諦めの悪さだけはよく分かった。
あそこまでやられたのに今こうしていることが、それをよく表している。

「さて、どうしたものか」
「そうだな。今ここでアイツらを締めても、俺達Fクラスの評判が悪くなる一方だ」

あの二人の記憶を全面的に消しておけば問題は無いのだけど、何時何処で魔術協会が見てるか分からないからそれは出来ない。
雄二は雄二で頭を巡らせて考えてくれてはいるのだけど、こればかりはどうやら思い浮かばないらしい。

二人並んで唸る僕ら。
そんな僕の肩をつつくものがいたので振り返ると
「「……（ニコッ）」」
何故か二人仲良くメイド服を手にして僕を見つめるアルトと青子。
……つまりそれを僕に着ろと？
そんな気持ちを読んだかのように頷く二人。
ほうほう成る程。
つまり誰かが女装して気づかれないように常夏どもの評判を地に叩き落としてこいとな？
うん。
確かにそれならFクラスだとは分からないし、良いアイデアかもしれない。
というわけで、クレーマー撃退女装作戦が実行されることになったのだった。

「ところで二人とも」
「「どうしたの？」」
「あれを着るのって……」
「「明久」」

「いやぁあああああ!!??」

第11話

この時ばかりはあの二人を恨まずにはいられない。
改めて見つめ直した手鏡には、透き通るような銀の長髪に、雪のような白い肌、そして血を象徴する真紅の瞳を煌めかせている絶世の美女……あ、いや自分で美女っていうのはおかしいか。
とにかく自分でも見とれてしまいそうな程たおやかな女の子に仕立て上げられてしまったのだ。
おまけに『可愛い!!』と頬ずりされ、挙句のスリーショット（撮影者：ムッツリーニ）

「――――って訳なんだけどさ……幾ら何でも酷いと思わない、雄二」
「そ、そうだな……っ」

お願いだから顔を紅くしながら話さないでほしい。
男にそんな反応見せられても嬉しくない。そして霧島さん、何故貴女は僕を抱きしめて頬を突ついてるのかな？

「……可愛いから」

ごめんそれ全く理由になってないから。

「今更だけどよ。お前の地毛って茶色だったろ？それが今は銀髪。ここ数年の間にどうやったらそこまで色素が抜け落ちるんだ…」

何気無い雄二の呟きにギクリと肩を震わせる。
色素の脱色については投影の酷使による副作用によるものだけど、今それを悟られる訳にはいかないんだ。何せこれはアルトや青子にも黙っている事だから。

この事を知った二人の悲しむ顔なんて見たくないし、この事を知った二人に殺されたくない（ここ大事）。

「ま、それはそれでアルビノみたいで似合ってるけどな」

「……うん。アルビノは病状だけど女の子には憧れてる人もいるから」

良かった。

理由については言及されなかった。……でもアルビノ、ね。

ちょっとだけ似てるかもしれない。でも僕としてはどちらかと言うとホムンクルスの方だと思う。

「それはそうと翔子」

「……何？」

「……彼方此方で絶望してる女子達を慰めて来い」

「……う、うん」

雄二が指差した先には、僕を見ながら床に手をついて号泣してる優子さん達女子一同。

いや、だからやめて。

それされると僕も居た堪れない気持ちで傷付くからさ……。

心の中でさめざめと泣きながら未だにFクラスの悪評を喚き散らしている常夏の所に向かうのだった。

「お客様、周りにご迷惑ですので静かにお願いします」

「あ〃ぁ？———って、へえ」

「こんな綺麗な女もいたのかよ」

振り向きざまに僕の全身をイヤらしい目で舐めるように見つめてくる常夏。
背筋にゾゾゾっといった悪寒が駆け巡り思わず両腕で身体を抱いてしまう。その仕草が二人を興奮させてしまったのか、常夏の口元は一段と吊り上っていた。
……いけない。
この手の事は初めてなので、平常心を保てなかったみたいだ。

（I(体) am(は) the(剣) bone(で) of(出) my(来) sword(て) s(い) w(る) o r d
――）

瞳を瞑り、慣れ親しんだ自己暗示にも近い呪文を心の中で呟く。
うん。大分落ち着いてきた。
一言目で分かったけど、ただ単に丁寧にお願いするだけでは相手に嘗められる事が分かった。
接し方を変えなくては。

「その飾りの耳では聴こえないですか。周りにご迷惑ですので口を慎めと言っているんです」

優しく接しても相手をつけあがらせるだけ。ならば毒を以って話さなければ。

「……ッ！」
「テ、テメェ……！」

あの外道シスターの毒舌には片鱗すらも届いていなかったので、どうなるかと思ったけど案の定キレてくれた。それだけでなく凄い短気らしいのか僕に掴みかかって来た。

「……女の子に掴みかかるなんて最低ですね。これはそれ相応の罰を受けて貰わねば」

そう言うとスカートのポケットに手を入れ、

「……捕らえよ、天の鎖（エンキドゥ）」

周りに聴こえないように真名を開放し、ポケットから引き抜くような感じで投影した鎖を解き放ち二人を縛り上げた。

「な、何しやがるんだ!?」

鎖から抜け出そうと必死にもがく二人。けどそれは悪手だ。天の鎖（エンキドゥ）は特性上、神性の高いものにその効果を発揮するが、それは人間であっても少なからず効果的だ。

ましてやこの二人は魔術も知らない一般人。

天の鎖は二人が暴れれば暴れる程強く縛り上げていく。

「おーい明久」

後ろから雄二がやって来たので振り返る。

その時、開いた窓から突風が吹き込み僕のスカートを一気に持ち上げた。慌てて押さえ込むが時すでに遅し。

「二人の処刑はもう済んだかって……花柄の白？」

その一言で僕の顔は真っ赤に染まってしまった。雄二の顔も紅く染まり出している事から聞き間違いではないのは間違いない。震える口から辛うじて言葉を紡ぎ出す。

「き」

「き?」
「キャァァァ天の鎖よーーーっ!!!!」
絶叫に近い悲鳴を上げ、真名を開放する。
「ちょ、ちょっと待てギャァァァァ!!??」
それも無意識に真に迫る程の骨子で投影していた為、これでもかという程雄二をキツく縛り上げていた。
アルトに青子。
せめて……せめて下着だけは本格的にしないで欲しかった。
生まれて初めて女の子らしい悲鳴を上げてしまった事に、僕はこの先に一途の不安がよぎって仕方ありません。

「これより召喚大会第二回戦を始めます」
時刻は昼、会場のフィールドには対戦相手である小山さん、根本君にペアである至る所傷だらけ（アルトと青子にやられた）な雄二が対峙している。
「ははっ！問題児コンビが相手とは楽勝じゃないか！」
僕達を見て小馬鹿にし出す根本君。対称的に小山さんは小首を傾げて
「その……どうして坂本君はぼろぼろなのかしら」
ある意味当然な質問をぶつけてきた。全てを話すとなると長くな

りそうなので、簡潔に纏めて説明するとしよう。

「その……初めてを見られて」

「女の敵ね（キッパリ）」

「おい待て明久！お前の簡略すぎる説明のせいで凄い誤解を招いてるじゃねぇか!?」

これだけで全てを察してくれた小山さん。やはり女の勘は恐ろしい。

「吉井君、同情するわ。だから気を取り直して」

それだけでなくこちらの心配までしてくれて思わず涙しそうになった。

「始めてください」

こんな状況下でも冷静な高橋先生の合図によって僕達は召喚獣を召喚する。

僕の手には前回と同じく漆黒の弓に矢。二、三本程指につがえ引き絞ると、牽制の為に足下に連射する。

相手（まと）を狙うわけではない。故に己の心を狙うなんてしなくていい――――最初から的から外れる感覚で放つだけの事なんだから。

三本の矢は寸分違わず目標の地点に突き刺さり、疾走していた二人の召喚獣は足を止めた。

「……もしかして吉井君って、弓道習ってた？」

「あ、やっぱり分かる？」

「じゃあ中学の県大会準優勝者の吉井って…」

期待の眼差しを籠めてこちらを見つめる小山さんに、僕は頷いて肯定する。

「きゃーやっぱり！私茶道やってるから日本の文化の弓道にも興味あったのよ！あの時は惜しかったわね。怪我さえしなければ全国制覇も夢じゃなかったのに…」

「全国だなんて、そんな大げさな…」

「ううん！そんな事ないわ！見てたけど百発百中だったじゃない」

もはや二人だけのきゃっきゃウフフである。なぜこんな表現にしたのかと言うと、傍から見れば仲の良い女子の会話にしか見えないからである。

そんな彼女を見て

「友香、今は勝負に集中しろ！」

「棄権するわ」

「うぉぉい!!?」

注意を促すが、小山さん即拒否。

「だって射の名手よ。絶対勝てないわ」

「くっ！だったら俺だけでも『根本ＤＥＡＤ』うぉぉい!?」

何やらこちらに走ってきたので、急所である頭蓋を一撃ち。それだけで彼の召喚獣は光の粒子となって姿を消した。

「……だから無理と言ったのよ」

Ｃクラス　小山友香　棄権

Ｂクラス　根本恭二　ＤＥＡＤ

「勝者Fクラス　　坂本雄二＆吉井明久ペア！」

こうして二回戦は意外な形で僕らの勝利で幕を閉じた。

ちなみにこの後小山さんと割りと仲良くなった。

第12話

あぁ……これは夢だ、こんなのは現実にはあり得ない。
こんな……炎が渦巻く空中に歯車が回っているような荒野に、墓標のように突き立つ多種多様な刀剣。
そんなおぞましくも寂しい世界に、白と黒の対になる双剣を手に佇む紅い騎士。
一目見ただけで分かる。アイツは人間ではない何かだ。俺どころか常識すらも相手にならないだろう。
そして向かい合うように満身創痍で膝を付いている茶髪の少年。
全身傷だらけなのに、ソイツの瞳は闘志に溢れていて、表情は嬉しげ。まるでその騎士に鍛錬を師事してもらってるみたいだ。
……姿形は明確に視認できても、夢の中なのか認識は出来ない。
…ただ、ソイツが何故か…何時も行動を共にしているお人好しに似ている気がした。

世界は切り替わり、場所は文月とは異なる街に移り時刻は夜。
その郊外の森の最果てに聳える古城の中で、地に描かれた魔法陣のようなアートの側で手をかざしているのはまたしても茶髪のアイツ。
心なしかその茶色から色素が少しばかり抜け落ちている気がした。
やがて魔法陣が光を帯び、現れたのは黄金の鎧に包まれた騎士……違う。これは王だ。
この世の全ての理を具現しているかのような王気（オーラ）を放つ絶対の王。
そんな奴が自身以外に従うわけがない。
…なのに、なのにお人好しは物として見られながらも、そんな奴を理解しようと、ただ不器用に走り続けて行った。

分からない。
どうして自分を物として見るような奴なんかを理解しようとするのか。俺には到底出来そうには無いが一つだけ分かる事がある。

ただお人好しが底無しの馬鹿だったという事だけだ。

――夢、か。

文月学園の屋上で仮眠を摂っていた雄二は目を覚ました。
夢にしては生々しすぎるがそれでいて非現実的な世界。
夢とは過去の出来事を再現する事があると聞くが、俺はこんな不可解な過去なんか持ち合わせてないので、俺の記憶ではまずない。
改めて鮮明に思い出そうとするが、全くもってどんな夢だったのかが思い出せなくなっていた。
何時迄も思い出せなくては埒があかないので、一先ずこの事については思考を放棄し、状況を整理する。

確か、常夏制裁（俺も巻き込まれた）の後に、決勝戦の対戦相手が翔子と木下姉だと判明した為、それに備える為、屋上で仮眠を摂る事にしたんだったな。
腕時計を確認すると決勝戦まであと僅か。
……一先ず隣りで寝ているお人好しを起こすか。
そう思い、隣りを見るや慌てて視線を逸らす。
な、ななな、ななななな――ッッッ!!?
――なんっツゥ格好で寝てやがるんだこの馬鹿はぁぁぁぁ!!
ていうか忘れてた！
コイツがまだメイド服のままだってことを森羅万象まるまる忘れてた！

肩もとやスカートが半分以上捲れ、雪のように白く艶かしい鎖骨や太腿が露わになっているのを見て、思わずゴクリと喉を鳴らしてしまう。

ダメだ。
これ以上この状況だと俺の理性が壊れかねん。
というか本当に男なんだよな？
今更だが女装の域を超えてるぞ。
女体化の域に入ってるぞ!?

鼻から熱いものが込み上げてくるのをグッと堪えて、やっとの事で明久を起こす事に成功したのだった。

「それでは召喚大会決勝戦を始めます」

高橋先生の声が会場に届く中、翔子と優子に明久と雄二は互いに向き合っていた。

「やっぱり来たわね、吉井君に坂本君」
「……未だに女装姿なのも計算通り」

二人は真正面にいる僕達を闘志の籠った瞳で見据える。
一方僕は、この先に感じる微妙な違和感が何なのかを考えあぐねていた。そして先ほどから間接的に感じるこちらへの視線。
取り敢えず高橋先生の開始の合図と共に召喚獣を呼び出すが、その時にその違和感が何なのかが判明した。

「どうした？明久」
「……弓が出せない」

そう、今まではシステムが僕の投影技術を考慮して可能にしていた召喚獣による擬似投影――――それがここに至ってできなくなっていた。

システムの偶発的な故障か？

と一瞬考えるがすぐさま打ち消す。

こんなタイミングの良すぎる偶然なんてそうそう起こらない。

数十秒程考え、ある結論に辿り着くと僕は深くため息をついた。

そしてこの会場を中継しているビデオカメラに視線を合わせるとある事を呟いた。

――――ワケガワカラナイ。

会場の様子をモニターで見ていた教頭の竹原は不可解な事に恐怖に陥っていた。

この召喚大会の景品である腕輪は欠陥品だ。

それも高得点者が使用すると暴発するという筋金入りの欠陥品。

私がこの学園の長に就くには、何としても藤堂の存在が邪魔だった。

故に彼女の発明品の不備を、あのAクラスの二人によって世間に知らしめる必要があったのだ。

無論その為に、様々な策を講じた。

推薦を餌に、三年の二人を扇動し着々と勝ち進めている学年最底辺のクズ二人を妨害させたり他クラスに悪評を広めさせたりもした。

だがそれでもFクラスは決勝戦まで勝ち上がってきた為に、最後の手段として、戦況を左右している観察処分者の召喚獣をシステムを変更する事によって大幅に能力を低下させた。

ここまでやれば万全だろうと満足気に頷いた時にそれは起こった。

奴はカメラ越しに視線を合わせると、まるで私に話しかけるように口を開いた。

「――ミエテイルゾ」

そう、確かにアイツは呟いたのだ。これまでしてきた事は無駄なんだよ――そう宣告しているかのようにも見えた。

……バカバカしい。

こんなに能力を制限されて相手はAクラスの代表に上位者。

勝てるわけがない。

そう落ち着かせて、冷静にモニターを見つめ直した。

さて、色々と試してみたところ干将・莫耶を始め槍や長剣も出せない所から擬似投影自体が使用不可のようだ。

手持ちにあるのは僕の召喚獣本来の装備である木刀のみ。

流石にこれでAクラス相手に向かうのは厳しいものがある。

……ここは一つ、魔術を使いますか。一応刀を傷つけずに操る鬼才

の剣士に心当たりはある事だし。

瞳を瞑り、自己を心の中に埋没させる。

「憑依経験（トレース・オン）」

模倣するのはあの群青色の袴を着た侍の剣技。

投影物ではなく記憶の中の『記録』から経験を憑依させている為、精度は数ランク程低下するが、あの人なら耐久性の低い日本刀の扱いを知り尽くしている。

それが木刀であってもだ！

こんな展開を誰が予想しただろうか。会場全体が息を飲んでその様子に見惚れていた。

それはそうだろう。翔子と雄二の場合は点数がそうそう離れていないから納得できる。だが明久の場合、優子の点数の三分の一にも満たないのだ。

そのはずなのに、木刀でランスに互角で渡り合うなんて常識から逸している。

明久は召喚獣を巧みに扱い、まともに打ち合う事をせず、円の軌跡を描くように木刀を振るい相手のランスを華麗に捌く。

いや、捌くだけではない。

相手の力を利用して木刀を翻し着実にダメージを与えていっている。

一方優子は優子で別の事で焦り、冷や汗を流していた。

（冗談じゃないわよ!?どうやったらこんな芸当が出来るのよ！）

この場合、優子の言う芸当とは明久の剣捌きだけではない。
相手の殺気の事を言っているのだ。
通常殺気とは相手を怯ませる為に全身から放つもの。
だが明久のそれは違う。
表情は涼しげではあるが、優子の召喚獣の首元にのみ殺気を当てている。
故に優子は常に自分の召喚獣の首を両断される結末を幻視しているのだ。

「……そろそろ決めますか」

そう呟いた明久は一旦後方へ下がり、そして木刀を水平に構える。
それを好機と見た優子は一息に間合いを詰めるが、それが悪手となった。

「――――秘剣・燕返し！」

放たれるは凄まじい速度での三つの弧を描く連撃。
優子の召喚獣は防御すら出来ずに全てを身に受け、光の粒子となって消滅した。
燕返しとは本来槍のような長さを誇る佐々木小次郎の愛刀、『物干し竿』を持ってこそ真の威力を発揮する。
もし優子があそこで間合いを詰めなければあるいは、リーチの短い木刀では結果が変わっていたかもしれない。無論、こうなることも明久の計算の範疇であるが。

「やっぱり三つ同時になんて無理か。……これをあの人は何なくやっちゃうんだものなぁ」

やっぱり化け物だよあの侍さん。
そう心の中でため息を吐きながら、動きを止めずに木刀を横に投擲

する。

それは体制を崩した雄二の召喚獣と、それにとどめを刺そうとしている翔子の召喚獣の間に突き刺さり、鉄甲作用によって地面ごと爆ぜた。

それによって翔子は一瞬怯むが、雄二はそうではない。

彼は明久と長く行動を共にしている為、突然の援護に内心驚きはしたものの動きを止める事はしなかった。

こうして急所を叩き込まれた翔子の召喚獣は光の粒子となって消滅し、召喚大会は幕を閉じた。

清涼祭の後の打ち上げは、雄二と翔子の提案によりA、Fの合同でする事が決まり、騒々しく賑わっていた。

そんな中、明久、アルトルージュ、青子の三人は離れの場所で少しばかり静かな休息を楽しんでいた。

無論これを見た姫路に島田は飛び出して行ったが、愛子や優子達に止められていた。

そこでふと思い出した青子が怖い笑顔で明久に詰め寄る。

「ねぇ明久。何か言い残す事はあるかしら？」

「いきなり死刑前の遺言催促!?ていうか何で！」

「とぼけないで。貴方、決勝戦の時に魔術使ったでしょ」

「存じ上げません（キッパリ）」

爽やかな笑顔でキリッと言い切った明久。

……勇者である。

それを見た青子はフルフルと肩を震わせ

「魔術使用の痕跡が残ってたのよこの大馬鹿ぁぁぁ！」

吼えた。それはもうクラス中の全員が驚いて振り返るくらい吼えた。

幸いなのは内容までは誰もが聞き取れなかったくらいか。

流石にこの時ばかりはアルトはフォローはしない。明久の投影魔術が協会側に知られる恐れがあったからだ。

「まあ良いではないか、ミス・ブルーよ。いざとなったら記憶を改竄すれば済むことじゃて」

「良くない！そんな問題じゃない……って――」

そこでようやく三人はいつの間にか一人増えていることに気づいた。

「「大師父（宝石爺）（ゼル爺）!?」」

「うむ。三人とも元気そうで何よりじゃ」

ふぉっふぉっふぉと笑いながらそれぞれの頭をぽんぽんと叩いていく。

「じゃなくて大師父がどうしてここに！」

「うむ。その事ではあるが」

ゼルレッチは懐から取り出した手紙をひらひらと明久の前で振り、

「明久よ。そろそろ彼らに会いに行ってもいい頃合いじゃろう。皆がお前を待っておるぞ」

それを聞いた明久の表情が一瞬明るくなるが、すぐに陰ってしま

う。

「ですが大師父。僕には未だに平行世界に行く術を得ていません……」

「そんな事じゃろうと思ったわい」

「え？――――うわっ!?」

俯いた顔を持ち上げ、目の前に放られた物を慌てて受け取ると明久は驚愕の表情をする。

「――！大師父……これは」

その手に握られていたのは、一見何の切れ味も無さそうな刀身が宝石で出来た剣。

そう、宝石剣だ。

「向こうの世界の衛宮士郎に感謝するんじゃな。二度目の無茶までして投影した物じゃぞ。まあ……あやつもそこまでしてお前には会いたかったのじゃろうがな」

「はっ、はい！」

今度こそ輝くような笑顔で明久は頷いた。

ちなみにアルトと青子はその笑顔に当てられ顔を紅くしていたのだが、

「ところでお前は何時迄女装したままでいるのかの？」
「……あ」
それはこれが原因であった。

第13話

「ここ……どこ？」

変なおじいさんに声をかけられ、あたりが眩しくなったなぁ――って
ぼぅってしてると、気がつけばさっきまでとは違う所にいた。

空にはけたたましい騒音を轟かせながら途絶える事なく飛び去って行く爆撃機。
そして焼夷弾が落とされる先には、街の人達が悲鳴を上げながら彼方此方を右往左往していた。

本能だろうか。
僕は何が起こっているのか幼い歳ながらも理解した。
あの小さいジェット機達は街の人達を殺す為に飛んでいるんだ、と。

叫んだ。
必死になって叫んだ。

――どうしてこんな事するの！
やめて――！と。

無論そんな願いなど爆音に掻き消され聴こえる訳がなく、聴こえたとしても叶えられる訳がない。
諦めずに街に向かって走り続けている間にも、たくさんの人が死んでいった。
今度は僕の上を過ぎさった戦闘機がミサイルを発射した。
爆発範囲が極めて広い対建築物、対人用の爆撃ミサイル。

これが着弾すれば一度に百人程の命が奪われるだろう。

――もう神様でも悪魔でも死神でもいい。とにかく皆を助けてっ!!

万願の思いを込めて祈った、その時にそれは起こった。

数多の命を奪わんと容赦なく疾走する爆撃ミサイルは、目標に到達する前に一筋の光線に貫かれ、上空数百メートル地点で爆発したのだ。

爆風を潜り抜けて地に舞い下りた何かは……一瞬正義（ヒーロー）の味方のように見えた。

黒の軽装の上に紅い外套を身にした騎士――貫禄漂う覇気からは英雄を連想させたからだ。

けどそれも一瞬で崩れ去った。

その騎士は侵攻する爆撃機を数多の剣群で次々と撃ち落とすと、今度は街にいる人達をも殺戮し始めたのだ。

これではただ、視界に入る物全てを殺しにきたようなものじゃないか！

頭の中で何かが弾けると、僕は堪らず騎士に向かって駆け出した。

今思うとどうかしていたと我ながら呆れている。

ただそうしなければいけないという使命感が勝手に身体を動かしていた。

当然の結果ではあるけど……無意味だった。

彼は僕を認識すると、排除すべき対象として取られたのか突風のように疾走し詰め寄り僕に向かって黒い剣を振り上げた。

殺される――そう覚悟しつつも、最後の意地を見せて瞳を開き相手を見据え続けた。

けれど、いつまで経っても彼は剣を振り下ろす事をしなかった。
そればかりか何かに気づいたように咄嗟にその剣を消したのだ。

怪訝に感じ、ゆっくりと騎士の顔を見直すと、彼は呆然とした様子で僕を見つめていた。

ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ　ｏｕｔ

（私を世界の鎖から解き放った……だと？）

何なんだこの少年は。
人にしては異常に白い肌に血のような瞳。

――死徒か。
自我を持っている為、操られてはいないと見るが……。
いや、この際死徒かどうかなんてどうでもいい。
そもそも抑止の守護者を世界の契約から切り離すなんて馬鹿げた行使……死徒や真祖は愚か、契約破り（ルールブレイカー）でさえ不可能な事だ。

だが実際に今の私は意思というものを明確に持っている。それが世界に隷属していない何よりの証拠だ。
この少年は死徒であるが故、人よりは力は強いようであるがそれだけだ。まだ死徒の本来の力にさえ遠く届いてはいまい。
では何故……。
改めて少年を観察するとある事に気がつく。

――不思議な瞳だ。

紅い、だが死徒のようにただ血のように紅いわけではない。
ルビーを思わせてそれでいて見るものを引き込みそうな程淡く優しい輝きを放つ瞳。

――これは魔眼の類か？

いや、魔眼でさえこんな芸当は出来ない。とすると神眼が妥当か。
というより何故この子は怯えている？
そこで私は未だに莫耶を振り上げたままな事に気づき慌てて投影を破棄した。

「中々に面白い少年じゃろう、エミヤよ」

背後から聞こえた笑いに思わず体が硬直する。
こ、このおどけた声はまさか……忘れるわけがない！

「大師父⁉」
「あ！宝石のお爺さんだ」

何故こんなところに貴方がいるんだ⁉この少年は貴方の知り合いなのか？
いや、それよりも

「何故もっと早く来なかったんだ！危うくこの子の命に手をかけるところだったのだぞ！」
「無茶を言うでない。ただ狂っただけのお前ならば止められん事も無かったが、世界一つ分の魔力を供給されたお前を止めるとなるといくら儂でも無謀極まるわい……」

確かにそうだ。
抑止の守護者とは魔法に至りそうな魔術師を滅する為にも世界から使役される事がある。
例え根源に至った魔法使いでも守護者に勝てるかどうかは分からない。のらりくらりと逃げ切る事は容易いだろうが……。
実際目の前のハッチャケ爺さんは平行世界に行ったり来たりしてそうしてるわけだが……。

「それでこの子の力を頼ろうと？」
「うむ」
「全く、貴方という人は……」

相変わらずの無茶振りに頭を抱えたくなる。一歩間違えれば大師父はともかくもこの子は間違いなく死んでいた。

「あの、エミヤさん。僕は大丈夫ですよ。あと僕は吉井明久といいます」

驚いた。
多少怯えてはいるものの、それは死に対してではなく私の殺気に当てられてのもの。
この子……いや、明久は今までに死を見た事があるのだろうか。

「実を言うとなエミヤシロウ。ここへ来たのはお前に頼みがあったからだ」
「……頼み？」

――猛烈に、嫌な予感がする。

「明久の面倒をしばし見てやれ」

……それはもうお願いではなく命令なのでは？

「いや、その…だな大師父。それはいくら何でも」

引き受ける訳には……

「明久の根源がお前と同じだと言ってもか？」

「なっ!?」

何を言っているんだこの爺さんは!?私の根源と同じだと！

「流石に信じられん話ではあるがな。でもほれ」

そう言って渡されたのは鉄の鎖。

解析（トレース）してみると間違いなかった。骨子の想定は酷く、中身が空洞に近いがこれは紛れもなく投影物だ。

「因みにちょっとしたナイフで試させてみたのじゃが、そちらの精度は比較的良かった」

それに剣の属性まで同じとは……。

どうやら根源が同じだというのは真実らしい。思い当たるのは平行世界で本来その力を持つ衛宮士郎が明久の世界にはいなかった事から、修正として明久に備わったのかもしれんという事だが……こればかりは分からんな。

それならば大師父が私に任せたのも頷ける。

「分かった。私は構わないが…君はいいのか？」

だが明久が良いならばという条件付きだ。それが駄目ならば協力

はせん。

「え？う、うん。アルトには伝えてあるってお爺さんも言っていたし」

「……アルト？」

妙に聞き馴染みのある名前に思わず聞き返してしまう。

真っ先に思い浮かんだのはアルトリアだが、この場合彼女の事では無いだろう。それに略名のようだ。

〈その頃のアルトルージュはゼルレッチの置き手紙を見て絶叫していた。〉

「アルトルージュの事じゃエミヤよ。して明久の恋人でもある」

「……頭が痛くなってきた」

一体何を言っているんだ。

この子はかの死徒の姫君と知り合いだと。それも恋仲？

幾ら何でもまだ十歳に届いたばかりの子にそれは無いだろう。

「『光源氏大作戦ですこと！』と言っておったが……ん、どうした？」

「いや、なに。……姫君の残念な一面を知って落ち込んでいるんだ。気にしないでくれ」

先ほどの事は忘れるとして、明久は私に着いて行くことを是としている。これは良い判断だろう。

魔術協会に狙われる事となった場合、今のこの子の力では自分自身を守る事など出来ないからだ。

いつか自分で自分を守り切る力を持つその日まで……私が見ていかなくては。

クッ、我ながら甘すぎるな。

思わず苦笑してしまう。

「……分かった。この子の世話は引き受けよう」
「うむ。明久よ、時が来れば迎えに来るからの。では頼んだぞわが愛弟子、エミヤよ」
「ああ。任された。では行こうか、明久」
「うん！」

こうして大師父は平行世界に姿を消し、私は明久を連れ二人が身を安住出来そうな知人の所へと向かった。

第14話

二人がやって来たのは、冬木の繁華街であり、その中でも人通りが少ない小ビルの壁の前であった。壁を射通すように睨みつけているのはエミヤ。着込んでいるのは概念武装の紅い外套ではなく、極めて一般の黒いシャツ。繁華街で紅い外套では流石に目立つとの事なので、ひとまずは投影したシャツを着ているのだ。

それでもこの二人は周囲から不審な目で見つめられていた。というのもエミヤが壁を睨みつけている行為　ーー実をいうとこれが初めてではない。

彼はここ冬木に来てからというもの何度もこういった事を繰り返していた。

周囲からそんな視線を向けられ明久はそわそわと落ち着かなく瞳をさまよわせているが、エミヤはそこふくかぜといった風に、壁に視線を集中させている。

そして息をふっと吐くと口元に穏やかな笑みを浮かべた。

「やれやれ。生前とはからっきし違う場所とはな……。彼女も面倒な事をしてくれる」

「恋人さんの事？」

そんな当たり障りのない明久の好奇心から出た言葉にエミヤは思わず吹きかけてしまうのを眉を潜める程度に耐えた。

「君は何をいきなりっ！……いや、そもそも彼女は私には不釣り合いなほどの美貌の持ち主であり、というよりあの性格破綻者に恋話など期待するだけ無駄なことだ」

「そ、そうなの……？」

生前に余程嫌な思い入れがあるのか、溜め込んでいたことをまくし

立てるように、一気に話したエミヤに明久は彼女とは一体どんな人なのだろうと冷や汗を浮かべてしまう。

「さて、着いたぞ。この壁も今まで同様、一見ただの壁に見えるが違うものだ。明久、瞳に精神を集中させるように力を込めてみろ」

「こう？」

言われたように明久は瞳に精神を集中させ、魔力を上乗せさせると

「あれ!?道が出来てる！」

「それが認識阻害というものだ」

「認識阻害？」

「人の意識がこちらに向かわないようにする為の魔術の事だ」

（これが……魔術）

初めて見る魔術というものに明久はしばらく惚けていたが、

「惚けるのなら後にしたまえ。そこで突っ立っていると一般人に察せられるぞ」

「あ、うん！」

先へ奥の方へと足を進めているエミヤを明久は慌てて追いかけていった。

「っ!?」

案内された通りに突き当たりの建物に入ったけど、途端に短いナイフを持った女の人に斬り伏せられようとしたところをエミヤさんが助けてくれた。
両手には黒と白の対となる陰陽剣、干将・莫耶が握られている。

「君は子供相手にも見境なしなのか？人形師よ」
「フン……ここを嗅ぎ付ける輩は子供であろうと容赦はしないのが普通だと思うが。そこはどう思うかい、使い魔よ」
「クッ、違いない。だが君は一つ思い違いをしている。私は使い魔などではない。一人の英霊だよ」

警戒心を強めている相手に対し、エミヤさんは不敵な笑みを浮かべて対峙している。
そればかりか懐かしげにその相手を見つめてさえいた。

「英霊？」

女性は訝しげにエミヤさんを見つめると、何かに気づき突然笑い始めた。

「ククッ…そうか！貴様は五次で槍使いと戦っていたあの英霊か！」
「やはり見ていたか。冬木に工房を陣取っている君が聖杯戦争を素知らぬふりなどするわけがないだろうからな」
「当たり前だ。あの戦争には人形作りの原典である英霊が7人も出てくるのだからな！それでお前はどんな理由で私を訪れたんだ？」
「ああ、その前に一ついいかね？」

彼女と話を繰り返すうちに、少しずつ眉を潜めていたエミヤは、ここで核心にふれることにした。

「先ほどまでの話からするに、どうやら君は私を知らないな？」

「？何を当たり前のことを言っている」
「成る程な。どうやらここは生前私がいた世界とは少しばかり違うようだ」

ということは可能性である平行世界の一つか――そう呟くエミヤに彼女は口元に意味深な笑みを浮かべる。

「ほう？詳しく聞かせてもらおうか」
「そうだな。簡単に言えば私は君、蒼崎橙子（あおざきとうこ）の知人だったのだが、まあそれは後で話そう。今回用があったのはこの少年の事だ」
「こっちの少年がだと？」

子供が私に何のようだ？とも言わんばかりに明久を訝しげに見つめる橙子。
その時、その少年がすっと自分を見つめていることに気がつく。

「何だ？」
「（誰かに似ているような……あ、もしかして）青子のお姉さん？」

どこからかこめかみの裂ける音がした。

「くっ…くく。一本取られたな橙子」
「式…それは私に喧嘩を売っているのか？」
「全く。オレが言っているのはこの少年の、それも邪気の無いただの疑問にお前が目くじらを立てていることをいっているんだぜ」

フン…と不機嫌に視線を逸らす橙子。
嫌悪を超えて憎悪すら感じている妹の名を聞かされたばかりか式という女性にいじられる始末。
これで苛立ちを覚えない方がどうかしてるが……。

「この少年はまだ未熟でな。自らを守れるだけの力を持ててない。それまで私が鍛えようとの事なのだが、その為にこの工房に住まわせてほしい」
「ならばそれに見合うだけの対価を用意するんだな。魔術師とは等価交換が原則だ。それはお前もよく知っていることだろう」
「それならば私がここに滞在するだけで十分な対価なのだろうが、加えて護衛も兼ねてやろう」
「……私を馬鹿にしてるのか？」

橙子の周囲から殺気が漏れ始める。式という女性は涼しげな表情のままであるが、その手はナイフの柄にかけられている。
明久は半分涙目でエミヤの背後に身を隠すが、等のエミヤは至って平然な表情をしていた。
そればかりか皮肉気に唇を吊りあがらせ、

「君達も贅沢だな。世界一つ分の魔力を供給された英霊に満足ではないと言っているのだからな」
「なん……だと……っ！」

意味不明だとばかりにエミヤ達を見る橙子だが、気づいた。
彼の内包する魔力量が常識でも測ることが不可能な程に桁外れである事に。

「まさか貴様……抑止力か」
「いかにも、その通りだ」

自分の中で結論を出したにも関わらず、未だに半信半疑な呟きにエミヤは不敵に肯定する。

「だが守護者とは世界の奴隷である筈。なのに何故お前は意思を持っている」

そう。抑止の守護者とは言わば世界（アラヤ）に隷属している英霊であり、それは世界の思惑通りに使役される為、彼らからは意思という物を剥奪されている。その為、こうして会話が成り立っている守護者と名乗る男に疑問を抱かずにはいられないのだ。

「…私もその時は現実を疑わずにはいられなかったよ。だがそれをこの少年の瞳は可能に出来る」

「…瞳。魔眼の類か？式、見てみろ」

「見るまでもない。魔眼だったら感覚で分かる。オレと似たような物だからな。その少年のはオレとは反対の、多分神眼の類だろう」

「そうだ。そしてそれは契約であれば世界ですら断ち切る神秘を秘めている」

「「!!」」

アラヤにすら目の敵にされている規格外の神眼。そんな出鱈目な瞳を持つ明久を橙子、式は驚愕の眼差しで見る。封印指定の人形師、魔眼を何の制約も無く扱える規格外をしてもこの反応なのも当然だろう。

もし明久が神眼を自在に使う事が出来れば、抑止力である守護者を制限なく世界の隷属から切り離す事が出来るからだ。

この若さにしてこの少年は既に世界を敵に回せるほどの能力を開化させているのだ。

「抑止の守護者に神眼の使い手。……確かに、これ以上は欲張り過ぎだな。良いだろう。お前達の滞在を対価にここを使わせてやろう」

「オレは特に問題は無い。英霊とやらにも刃を交えてみたかったからな」

（少しばかり誤算が生じたな……）

受諾してくれた二人を見てエミヤは冷や汗を流す。
別に承諾してくれた事に関しては問題はない。成果が大きいとさえ言えるだろう。むしろ問題なのは、うっかりあの二人の性格を忘れていたことだ。
橙子は面白い研究材料を手に入れた、と言わんばかりに舌なめずりをしそうな表情をし、式に至ってはエミヤと死合いたい事しか頭に無い戦闘狂に錯覚しそうな程に獰猛な笑みを浮かべている。
大変なのはむしろこれからだ。
頑張れ、エミヤ！

「橙子さん、ですか？」
「何だ？少年」
「その橙子さんは何で青子を嫌ってるの？」
「……その話をするな」
「嫌だ！青子はあんなにもお姉さんである貴方が好きなのに、何で貴方は青子の事が嫌いなの！」

青子が私の事を好きだと？
戯けるのもいい加減にしろ！私が青子を憎いように、それはアイツも同じだろう。
この少年の言うことには一々癪に障る。少し黙らせてやろうか？

「まあ待て」

失神の魔術を明久にかけようと動き出す前に、エミヤが口を開きそれを制する。

「とりあえず落ち着きたまえ。蒼崎、そして明久もだ。お前達は勘違いをしている」
「勘違い？」

「そうだ。まず明久が言っている蒼崎青子（ミス・ブルー）だが、それはお前が魔法の後継者を争う前のまだ幼い彼女の事だろう。その時は至って普通の姉妹であった彼女がお前を慕っていても別段おかしな事ではあるまい」
「成る程な。一理あるが……もうどうでもいいことだ」

肩に掛かった髪を払いのける彼女の表情からして、もう例え青子が子供の頃であろうとなかろうと本当にどうでもいいようだ。
だが明久に対する敵意は完全とはいかずも霧散していた。

「それより明久（ソイツ）を鍛える空間が欲しいんだったな。橙子、案内してやってもいいか？」
「もう勝手にしろ。私は少し休む」
「だってよ。オレについて来な」

式という女性は手招きすると奥の方へと消えていった。

「じゃあ私達も向かうとしよう」
「う、うん……（男みたいな喋り方だな）」

「っ！ここは!?」

地下に続く通路を抜けるとエミヤが驚愕の表情をする。それは明久だってそうだった。
そこは先程まで歩いていたような建物ではない。見渡す限り自然、

自然、自然。
いくら奥行きに際限が無い地下といえども、空を作るのには物理的に不可能だ。
「何度見ても呆れちまうよな。この空間、平行世界の一部と強引に繋ぎ合っているらしいぜ。何でも通りすがりの宝石魔法使いが勝手に作っちまった場所なんだ」
「またしても貴様か！はっちゃけ爺さん!?」
ただ通りすがっただけで、面白そうだからこんな世界作っちゃいました。
それだけの理由であちこちを騒がせるのが大好き。それが死徒27祖第5位ゼルレッチ爺さんです。
「それでどうする？その少年の鍛錬をするんだろ。やっぱりこんな華やかな場所じゃ不満か？」
どこか楽しそうにエミヤに話しかけてくる式に対し、エミヤも苦笑でやんわりと首を横に振る。
「いいや、これだけの場所なら十分過ぎるくらいだ。元よりこの子の鍛錬に景色は不要だからな」
そう言うとエミヤは地に片膝を付き、瞳を閉じて詠唱を始める。
I（体） am（は） the（剣） bone（出） of（来） my（て） sword（い）――

それは明久の耳に不思議なほどに吸い込まれていく。そう、自分の体は剣から出来ている。
そう、自分でも信じられないくらい、その言葉は頭に留まった。

――Unknown to Death.（ただの一度も敗走無く）

――Nor known to Life.（ただの一度も理解されないの）

ただの一度も敗走は無いのに……、ただの一度も誰からも理解されないなんて、そんな悲しい事があっていいのか。

そして最後の句によって詠唱の詩が完成する。

So as I pray, unlimited blade wo（その体はきっと剣で出来てい）

その瞬間世界は彼を中心に一変した。
果てのない焼け焦げた荒野に突き立つ無数の剣、剣、剣、剣。
中には神秘が内包された聖剣や魔剣の類もある。そして猛り狂う爆炎が渦巻く空には歯車が一つも噛み合うことなく、誰の助けも借りまいと、一輪一輪が孤独に回り続けている。
そんな世界で概念武装である紅い外套を身にした騎士が君臨して

いた。
威風堂々と佇むその姿は正しく、この世界に存在する無限の剣の王であった。
「これが固有結界か。橙子も使えるようだが、実際に見たのはこれが初めてだな……」
式は初めて見る固有結界というものに心が躍っていた。だが固有結界というものに興奮していたわけではない。
そこに突き立つ、聖剣、魔剣、それこそ多種多様な無限の剣に魅了されていたのだ。
「さて明久。これからお前が行う鍛錬だが、それは至って容易とも過酷とも言えよう」
そう言うとエミヤは足元の剣を引き抜き、
「この場で私と戦って、私から経験を引き出せ。それが一番の道になる」
切っ先を明久に向け宣告した。

第15話

――うっ……。

先程までの世界が淡く溶けるように崩壊してゆき、ゆっくりと瞳を開ける。その行為によってその世界が夢であったと分かるが、懐かしい物だったので嫌ではなかった。

開けた視界に見えるのは武家屋敷のような木製の天井に背中に感じる畳。

そして黒髪を長く伸ばした綺麗な女性に銀色に鈍く光る白髪の褐色の男性。

……ん？

「アーチャー？」

――黒髪の女性が吹き出すのが分かった。

「ぷぷっ……良かったじゃない士郎。それだけアイツの背中に追いついてきたって事じゃない？」

「…冗談でもやめてくれ遠坂。追いつきたい…いや、追い抜きたいのは守る力だけであってアイツそのものじゃない」

彼女――凛さんのからかいを含んだ言葉に男性は心底嫌そうな表情をする。

……ああ、思い出した。

姿こそ驚くほど似てきてるけど、彼はもうアーチャーとは別人だ。

「士郎さん？」

半ば呆けた状態での問いかけに彼は微笑みながら頷いた。
「ああ。久しぶりだな、明久。――お前もあの頃より更に変わったようだ」
「あはは……まだまだ骨子の想定が甘いから、ね」

干将莫耶と弓の投影については完全と言っていい程問題は無い。それこそタイムラグなど無視して投影出来る程だ。
だがそれ以外の宝具級の刀剣となると、早くて五秒遅くて十秒はかかってしまう。一般の人間相手には秒単位でも十分対応出来るが、魔術師や人外、英霊となると最低でも一秒以内に投影が出来ないと命が無いものと思ってもいい。
故に投影の鍛錬を怠るわけにはいかなかったのだ。

「――分かっているなら精々足掻け。忘れたわけではないであろうな。我(オレ)の愉しみで無くなったその時が貴様の最後だという事を…」
「――ギルガメッシュ」

隣で腕を組んでこちらを見下ろしている金の英霊――ギルガメッシュ。
忘れるわけがない。
傲岸不遜であり、果たして契約関係ですらあったのか疑問に思ったほどの…他ならぬ吉井明久のサーヴァント。
初めの方こそはこんなサーヴァントを引いてしまった事に後悔していたが、いつしか彼以外など有り得ない――そう思い込むようになってしまうまでに信頼するようになっていたのだ。
「心配するまでもないよ。あの時交わした言葉のまま、僕は君の愉しみなんだから」
「当然だろう、明久？　我のマスターであるならな」

不敵に笑い合う僕ら。
ギルガメッシュは強さでマスターを選ぶわけではない。
半分が神、半分が人間の原初の王。
故に彼は人間という物を見極める王であるのだ。
そして最後に交わした問答。
――それはギルガメッシュにとっての吉井明久はどういったものなのか。
そういうことだった。

「あの英雄王にそこまで言わせるなんて。――吉井君って本当に恐ろしい人ね…」
「いや。明久には人間としては模範といっていいほど惹きつける力があるからな。その在り方が人間を裁定する原初の王の目に止まったのだろう」

言っている意味は理解できないけど、とにかくもう一度ギルガメッシュと行動を共に出来る。
――それだけで僕の気持ちは高鳴っている。
……どうして未だに現界出来ているのかは謎だけど。

「たわけ。未だに我と明久の契約は繋がっている。霊体維持の魔力供給くらいは我が宝物庫で賄えるのが必然よ！」

……あ、そうですか。
随分御無沙汰してたせいか、君のデタラメさをすっかり忘れてたよ。
ていうかそれほどの宝持ってるのに、刀剣類のオークションに行った時なんて一銭も払ってくれなかったよね。
一生を過ごすのに困らない金運持ってるくせにドケチなんて最悪な性格してたよね。

――ってイケないイケない。
これ以上続けると彼…多分拗ねるだろうし何より後が怖い。

「……そろそろいいか？」
「何だ？まだいたのか雑種」

そこにいるはずのない人物の声が聞こえて、僕の時が静止した。

「……雄二は雑種じゃない」
「くだらん意地を張るな。我から見れば我が認めた物以外雑種に変わりない」

あー…、色々ツッコミたい事はあるけど、取り敢えず

「――何で雄二達がいるのさ」
「…俺に聞くな」

見慣れた野性味溢れる雄二は疲れ切ったように溜め息を吐いた。
平行世界にいる可能性としての雄二達と考えたくもあったが、向こうは紛れもなく僕の事を認識して話しているためそれは有り得ないだろう。
というより雄二、霧島さん、秀吉、康太、工藤さん、優子さんがこうして一緒にいるんだから絶対僕のいた世界の彼らだ。
――問題はどうやってここに来たかなんだけど……。第二魔法なんて絶対に無理だろうし、漂流とか？

「雄二達はここが別世界だって事、理解してる？」
「信じられんが…まあ、な」
「ええ。ここ…冬木っていう街みたいだけど、そんな所日本に無いもの」

顔をしかめさせながら呻く雄二に変わって、優子さんが冷静に代弁した。
――なるほど。
確かにそういう見分け方もあるか。
でもここまで来てしまったからには彼女達には知らせなければいけないことがある。
「――じゃあ僕達が魔術師だって事も理解出来る？」
「「……は？」」
……うん。それが普通の反応だよね。
「どうして平行世界に来たことは信じているのに私達が魔術師である事は信じられないのよ…」
「言うなリン。雑種の頭ではその程度だろうよ」
凛さんとギルガメッシュが呆れたようにポカンとしている雄二達を見る。
どうでもいいけど君達。
僕が留守にしている間に随分と仲が良くなってやいませんか？
あれか？あれですか？
互いのドケチ精神が意気投合して――
「あら吉井君。何か言いたいことでも？」
「いえなんにも？」
遠坂凛……恐ろしい人だ。
まあそれは置いといて今は雄二達に説明しないと。こういうときは論より証拠だね。
「――…投影（トレース）・開始（オン）」

慣れた詠唱を呟き、投影した西洋剣を雄二達に手渡す。魔剣でもなく何の伝承も無い無銘の剣なので、投影の際に生じる負担も無いに近い。

「……綺麗」

「ほんとだネ。でもこんな大きいもの、どこから出したの？」

――やはり手渡すだけでは無理があったか。

もっと納得させるに足る物でないと……。

……仕方ないか。

「――トレース・オフ…」

「「!!??」」

投影物を破棄する事によって、優子さんの持っていた剣が粒子となって消え去ったことに全員が驚愕した。

けどこれぐらいはしないと納得してもらうのは難しい。

「――工藤さん。今の西洋剣は最初からあった物ではないから取り出したわけではないんだ」

「え？…でも、じゃあどうやって――」

「それを納得してもらうためにも先のように剣を消したんだ。――あれは取り出したんじゃなく僕が空想によって鍛え上げた物なんだから」

「なーんだ。作ったんだったら納得だネ――――ってえぇぇぇーーー!!??」

今は僕達が魔術師である事を知ってもらうためにそう話したが、彼女の言ってた『取り出した』というのも間違いではない。いや、むしろそっちの方が正解だ。

僕達は起源である固有結界《無限の剣製》から取り出しているに過ぎないんだから。

「順応なさい。まだ信じられない気持ちも分からなくはないけど、人の常識から外れた神秘を行使するのが私達魔術師なのよ」

ここまで見せてもまだ納得しきれてないような皆に、凛さんが溜め息を吐きながらも理解出来ないのも仕方がないものだと説明する。

要するに割り切れと言うことだ。

「――で、どのようにしてここに来たの？」

平行世界へ漂流させるほどのエネルギーだ。

もし僕達の世界にそれほどの自然現象があるのだとしたらとても見過ごしていいものではない。

「……吉井が高そうな宝石みたいなナイフをもらったあたりから後をつけてた。そしたら変なお爺さんと出会って」

……何だろう。嫌な予感しかしない。

「……『そんなに気になるのだったらお前達も行ってくるがよい。――良い旅をな』って。――その後気づいたらここにいた」

「「やっぱりかぁぁぁあーーっっ!!??」」

僕と凛さん、今日最大の絶叫。

――っていうかあのハッチャケ爺さん何しでかしてくれてんの!?

神秘秘匿する気無しなの!?

ほら普段被ってる凛さんの猫の皮が剥がれ落ちちゃってるじゃないか！士郎さんも苦笑いしてるし……。

「まあその話はまた今度にしよう。もう夕食の時間だからな。君達の分も用意するからそこでくつろいでいてくれ」
「あ、手伝います士郎さん」
「それは助かる。君が来てくれれば桜も喜ぶだろうしな」

第六次以来の三人での料理。
――うん。楽しみだ！
それにしても気がかりなのはこの世界と僕のいた世界――時間軸が大幅にずれている。
確か僕がこの世界に来たのは三年前だったはず。でも士郎さん達にとっては五年ぶりの再開らしい。
……これからはちょくちょく顔を合わせに行こう。――士郎さんもその為に無茶をして宝石剣を投影してくれたんだろうし。

「明久。俺は野菜を切っておくからお前は肉を切ってくれ」
「今やってます。表面を焼いておきたいんで小麦粉取って頂けますか？」
「持っている。隣に置いておくけどいいか？」
「はい。ありがとうございます」

厨房に立つ僕と士郎さんは阿吽の呼吸でカレーの準備を整えていく。
長い間厨房を共にした僕達だからこそ互いが何をしてほしいかが分かるんだ。……まあ魂の根源が士郎さんと同じであるエミヤさんにしごかれていたのが一番大きいけど。
「それにしてもまた腕を上げたみたいだな」

「一人暮らしだからね。そりゃあ上手くはなるよ」
「……そうか」
「――でも今は千年城で暮らしてるから賑やかなものだよ」

前と違ってあそこにはアルトがいる。リィゾがいる。プライミッツがいる。

……フィナがいる…。

いやいかん、いかんぞ吉井明久。
家族は家族でも彼だけは警戒を怠ってはいけない。

――とその時インターホンが鳴る音がした。

「全く……桜のやつ。家族も同然なんだから勝手に上がってもいいって何度も言っているのにな…」

士郎さんは苦笑しながら深く溜め息を吐いた。
…ああ。そう言えば彼女、律儀な性格だったね。

「ちょっと迎えにでるから料理の様子を見ていてくれ」
「分かりました」

士郎さんが居間から出て行くのを見届けると、僕はそのまま煮込んでいる最中のカレーを睨む。

……さて、料理とは戦争と同義だ。例えちょっとした事でも目を離すことは許されない。
それに彼がいない中で試してみたい事もあったからね。
僕は隠し持っていた大蒜（にんにく）と生姜を取り出すと細かく切り刻み鍋に投入する。そして士郎さんには食後のデザートの為にと

偽って沸かしておいた本格的なコーヒーを三分の一カップ程同じく投入した。そして味が染み渡るまでじっくりとまぜはじめる。

――そう。一切の油断も許されない。

視線を外すなど論外――

「お久しぶりです明久さんっ！」

「……ノォウ」

抱きつかれた反動によって思いっきり視線が逸れてしまった。

「あはは。ダメじゃないか桜さん。料理から目を離してしまったじゃないか」

「……明久さんは私よりも料理の方が大切なのですか？」

「はっはっは！そんな上目使いで見上げても効果なんて的中じゃないかチクショウっ！」

「……お前って本当に嘘がつけないやつだな」

いや、綺麗な異性からの上目使いって凶器という物なんだよ士郎さん。それが温厚な桜さんのものだったら尚更。

ともあれこれで三人揃った事だし、カレー以外をちゃちゃっと終わらせるとしますか！

「姿もあの頃のままで可愛いです♪」

――――そろそろ離れてほしい。料理が再開できないではないか。

第16話

「う……んっ――」

窓から射し込んでくる朝日に目が覚める。

普通なら気持ちのいい目覚めになるのだろうが、僕は死徒なためそれはない。力の大半を死徒の衝動を抑制する為に費やしてるので辛いとなるほどではないけど、それでも月明かりの方が断然良い。

「……起きよう」

とはいっても目が覚めてしまった以上、二度寝することだけは僕の性格に合わないため起きることにした。

グッと伸びをして、洗面所に向かい顔を洗う。

やはりというかまだ誰も起きてはいないようだった。

普通ならこの時間帯には起きている士郎さんでさえ、昨日は飲み過ぎていたのかまだ眠っているようだ。

未成年の僕は飲んでいないためこうして起きてるんだから、雄二達もそろそろ起きてくる頃だろう。

桜さんが来たら一緒に朝食の準備をしなければならないし、それまでの間に久しぶりにあの場所で日課をこなすとしますか。

鏡の前で髪型を整え、ルビーのように透き通る真紅の瞳を見て微笑むと、そのまま衛宮邸の道場へ向けて歩き出した。

「あ～～……なして？」

間の抜けた反応をした僕は悪くないと思う。だって道場に入った時には既に先客がいたからだ。
窓側に正座して眼を閉じて静かに瞑想をしている金髪の少女――――そう、セイバーだ。
彼女も僕と同じように凛さんが現界させ続けているサーヴァントであり、腹ペコになると何をしでかすか分からないイングランドの暴君である。

――けどおかしい。
そんな彼女がなぜ昨日の夕食の場にいなかったのだろうか。
先程から霊体化して後ろに着いてきてくれている、同じく王様に聞いてみる事にする。

「どういうこと？ギルガメッシュ」
『そう不思議なことではあるまい。アヤコの作った豪快カレーというものに興味そそられ、着いていっただけの事だ』

な、なるほど……。
確かに美綴さんのカレーならセイバーが釣られてしまうのも頷ける。
だって皮だけ剥いたじゃがいもを丸ごと入れてしまっているのにあそこまで美味しく作れる人なんてそうそういないし。
と、そこでギルガメッシュがにやりと笑みを浮かべた気がした。

『――して、どうするマスター』
「どうするって？」
『決まっているではないか。あそこに我達の気配にも気づかない愚かな騎士王がいるのだぞ。さあ、どうする明久』

――そうか。
それは良い情報だよギルガメッシュ。

眠っている状態にも近いセイバーがいるチャンスをどうするかだって？
決まってるじゃないか！
胸ポケットからこの時のためにと常備している黒マジックペンを取り出す。
ライオン好きのセイバーの為に僕が一肌脱いであげよう。
――まずは右頬に横線を三本。
――次に左頬に同じように三本。
これで猫ひげの出来上がり。
そしてお鼻を黒く塗りたくるとあら不思議。ライオンのお鼻の完成です。
さあ最後はライオンは関係ないけど個人的な悪戯……もといサービスで寝ているのに起きているみたいに瞼に目を――
「何をしているのですか？アキヒサ――」
っていつのまにか起きてるしーー!?
「お、おはようセイバー……」
「はい、おはようございます」
「今日も良い天気だね」
「ええそうですね。――それでどういうことですか？」
駄目だ。そうとう怒ってる……。
いやまさか起きるとは思わなかったし！

助けてギルガメッシュ！

――――――――――――シ～～ン。

「……あれ、ギルガメッシュ？」
「英雄王ならここにはいませんが」

アイツ僕を身代わりにしたなーーっっ!!??
やばい何とかしてセイバーを宥めないと僕の命が危ない。
落ち着け吉井明久！そうだ。ここはセイバーの良いところを見つけて誉めてあげればいいんだ。
セイバーの良いところセイバーの良いところセイバーの良いところセイバーの良いところセイバーの良いところ……。

――――――そんなのあったっけ？

「……明久？」

やばい今の疑問が勘繰られたようだ。だって僕の名前の発音が流暢になってるし！
とにかくこれ以上は怒らせないようにしないと。そのためには何でも良いから探すんだセイバーの長所を。

「可愛いライオンさんだね♪」
「剣を構えなさいアキヒサ」

――――――終わった。

「ってなぜに約束（エクスカリバー）された勝利の剣を手にしてるのですかぁぁ!!??」

ほぼ反射的に投影した干将莫耶で聖剣を受け止める。

「良い機会です。今ここで成長した貴方の実力を確かめてあげましょう」

「いや、それ今無理やり取り付けた理由だよねってぬおお!!?」

思ったことを正直に話し終える前に、袈裟斬りが来たので身体を捻って強引に避ける。

こうなったらもう自棄だ!!

多少の怪我くらいくれてやるからセイバーの気持ちを落ち着かせよう。

幸い彼女も人間並の身体能力には抑えているみたいだし。

「確かに私はライオンは好きです！ですからって……ですからってこれはないでしょうアキヒサァァ!!」

「ちょっとおぉーー!?英霊の力は出したら駄目だってぇぇ!!」

つぅ!!何て力だよ。

見た目あんなに華奢なのに筋力Ａって世界は残酷だよね。

あ、干将も莫耶も破壊された。これはもうヤバい…っていうか死ぬ。

――――――仕方ない。

道場から盛大に木屑の煙が舞い上がる。
「ハッ！しまっ…すみませんアキヒサ！無事です……っっ!?」
セイバーの瞳が驚愕に見開かれる。
なぜなら干将莫耶が破壊され、無手になった筈の片手で聖剣を弾いていたからだ。その右手は異様に爪が伸び、そして強化されていた。
「ははっ。セイバー謝っておく。さっきまでは『早く終わらないかな』なんて思ってたけど、死徒としての能力を抑え込む為に使っていた力を開放した今は『もっと闘いたい』なんて思っちゃったりしてる僕を許して」
「性格若干変わってませんかアキヒサ!?」
「行くよセイバー！」
「落ち着いてください！」
――――いや、そういう君も身体から魔力放出してるからね。
「ふっ！」
「はぁ！」
『ちょっと待てお前らそれは不味い！』
『アンタ達暴れるなら場所を選びなさい!?』
「「……あ」」
士郎さんと凛さんが慌てて入ってくるのを見たとき、僕とセイバーは今していることの深刻さに気づかされた。
爪と剣がぶつかり合い、衝撃波が道場を吹き飛ばした。

「ったく、家のなかで英霊の力発揮するなんて何考えてるのよ！」
「しかしこれは…」
「なに？」
「なんでもありません…」

あの後、居間にてセイバーは凛さんに説教を食らっていた。
それにしてもあの顔で説教されている光景はかなりおもしろ…いや、シュールなものがある。

「聞いているのかね？」

かくいう僕も士郎さんに説教されている。しかも話し方がエミヤさんと同様になっていてこれは精神的にそうとう参ってしまう。

「それにしても君が死徒の第１０位に入っていたとは初耳だぞ。あのセイバーとも互角にやりあっていたようだしな」
「入っていたのは一年ほど前からだけど…理性を犠牲にしないと、狂ってしまわないと１０位の力は出せないから実感がないんだ」

そう、アルトルージュ――アルトが狂化すればかのアルクェイドと同等の力を発揮することが出来るけど、僕の場合は狂化してもリィゾやフィナ、そして力を抑え込んでいるアルトにすら届かない。

ん？ていうかアルトもこの世界のアルトも『血と契約の支配者』って言われてるんだし、死徒の力を出した僕に気がついたんじゃ？

ま、いっか。

「おーいセイバー。それ水性だから洗えばすぐにとれるよ」

さっきからずっとごしごし顔を拭いていたため、一応教えてあげるとセイバーは一目散に洗面所へと飛び出していった。

このまま見ているのも面白いけど、公衆の面前に出た時のことを考えると何時までもそうしてるわけにもいかなかったからだ。

「こうしてみると私達って非日常な暮らしを送ってるわよね…」

今日は桜さんと二人で作った朝食を皆で食べていると、凛さんがしみじみとそんなことを呟いた。

「何だよ遠坂」

「そうですよ姉さん。魔術師が非日常な世界を送るのは当たり前な事じゃないですか」

「あのねぇ二人とも。魔術師からみても私達は異常なのよ。最上級の英霊二人に封印指定一人、そして死徒…それも27祖が一人……同じ敷地内で暮らしてるなんて協会側からしたら放っておけないわよ」

……確かに。

自慢ではないけど僕のサーヴァント――ギルガメッシュは英霊の中でも最強のサーヴァントだと思う。

乖離剣エアの真名を開放すればエクスカリバーを上回る火力を発揮できるし、そして固有結界に近い空間を具現させ、流星にも近い空間断層を引き起こすエヌマ・エリッシュ（これはCCC版）は、恐らく真祖でも太刀打ち出来ないと思う。

でもね、凛さん。

「俺からしたら明久達がすごく異常なんだがな」

すぐそばにげんなりした雄二がいた。

他のみんなもそうだけど、中には例外がいる。ちなみにその人は小首を傾げて不思議そうにしているだけだけど。

「そうでないよ雄二。雄二の身近にも僕らに近い人がいるじゃないか」

「はっ？いやいるかよ」

「じゃあ仮にも黒魔術を使った霧島さんはどうなるのさ」

「……」

――――わ、ごめん雄二。トラウマを思い出させちゃった？

ってひゃいいぃ!?

襟から胸元に滑り込んできた誰かの手に思わず悲鳴を上げた。

「それにしても吉井君の肌の白さの秘訣は死徒だったからなんだネ♪寿命が長いってことは体の成長もそのままってことなんだよね？いいナ～♪」

「あ、愛子！手つきがやらしいわよ！」

「姉上もさわりたいと思っておるのじゃろ？」

「べ、べべ別に！そんなこと思ってなくないわよ！」

「思ってると言う意味じゃな」

「秀吉！康太！そんな呑気にしてないで助けて！」

「ワシは今鼻血を吹き出したムッツリーニの介抱に忙しくての」

「……死して一生の悔い無し」

それから十分以上も体の至るところをまさぐられたのだった。

うぅ……男の尊厳が。

まあ、気を持ち直して凛さんは気づいていないようだから言うけど

「凛さん凛さん」
「どうしたの明久君」
「27祖は後四人言い忘れてる」
「へ？何を言って『妾達を忘れておるぞ』――ってぎゃーー!?」

おお、凛さんが素の悲鳴を上げた。
そう、ここにはいつの間に来たのやらこの世界のアルトにリィゾ、フィナ、そしてプライミッツがいる。
ちなみに僕の世界のアルトとは口調が違うので見分けがつけやすい。

「ちょっと場所も教えてないのにどうしてここにいるのよ！」
「何。明久と妾とは契約を結んでおる。明久が死徒の力を開放した時点で血が知らせてくれたのだ」
「何その契約関係……反則じゃない」

いやそこが便利な所なんだよ凛さん。
どんなに認識阻害の結界を張られようが、僕が呼んだりアルトが呼んだりしたらすぐに場所が認識できてしまうんだから。
反則だろうが使わないと勿体ないしね。

「それはそうとアルト。アルクェイドとは仲直り出来たの？」
「出来ておらんしする気も起こらん」

即答ですか。
まあ気持ちは分かるけど。
だってアルクェイドの髪が伸びないのってアルトが魂レベルで切り刻んだからだし。

「そういう明久はあやつの殺人貴とは仲良くなれそうなのかの？」
「「いや無理無理」」

志貴さんの事が出た瞬間に士郎さんが反応し、僕とハモった。
一人を守るために他の人間を平然と切り捨てる彼の事はどうも好きになれない。
特に士郎さんの場合、全てを救おうとし、それでも救いきれない場合のみ一人を切り捨てる――志貴さんとは正反対の正義の味方を理想としてるため、志貴さんとは絶対に相容れないのだ。

「殺人貴とは頻繁に死合ってるさ」
「僕も士郎さん程ではないけど、自分の世界でよく争いを起こしてるよ…」

そう。
いつも向こうから攻撃してくるし、いつも僕の方が負けてるけど、そのときになったら志貴さんと同等の力を持つリィゾに助けられている。

まあこのまま守られてばかりってのも嫌だから鍛練は怠らないし、今回はギルガメッシュというパートナーがいるしね。

次こそは勝たせてもらう。

側に来たプライミッツを撫でながらそう決意を固めるのだった。